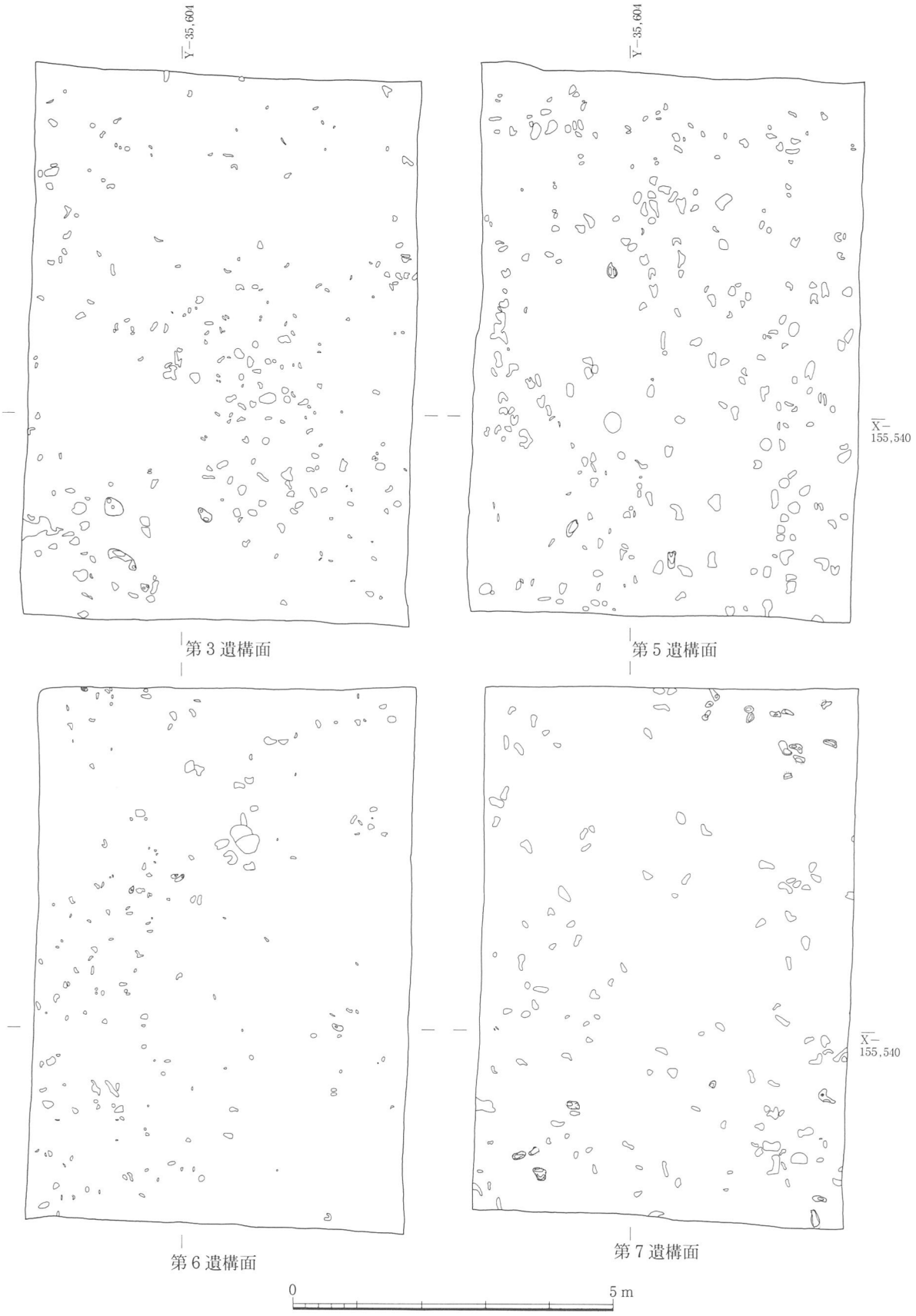



図55　96－3区第3～7遺構面

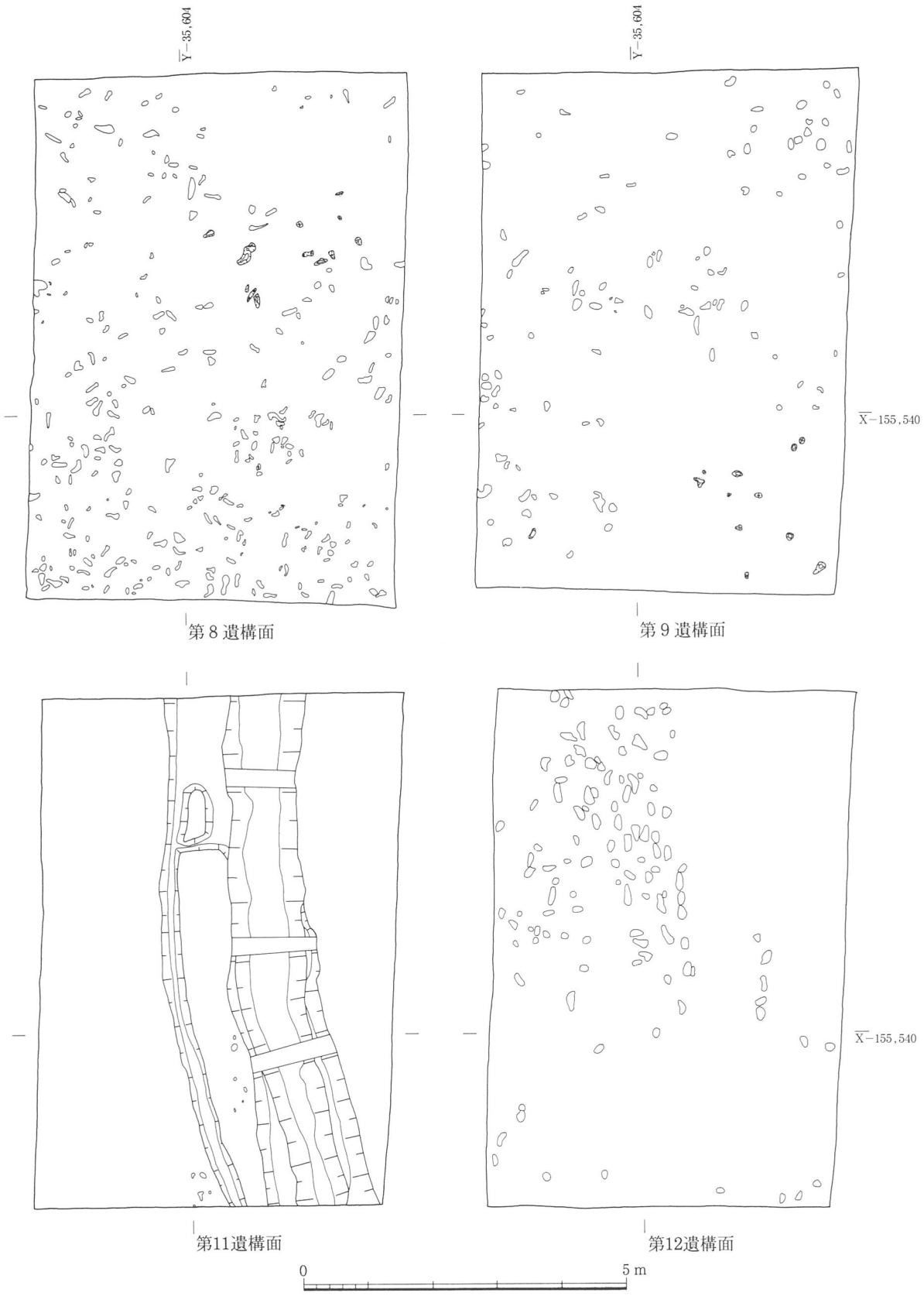



図56　96－３区第８～12遺構面

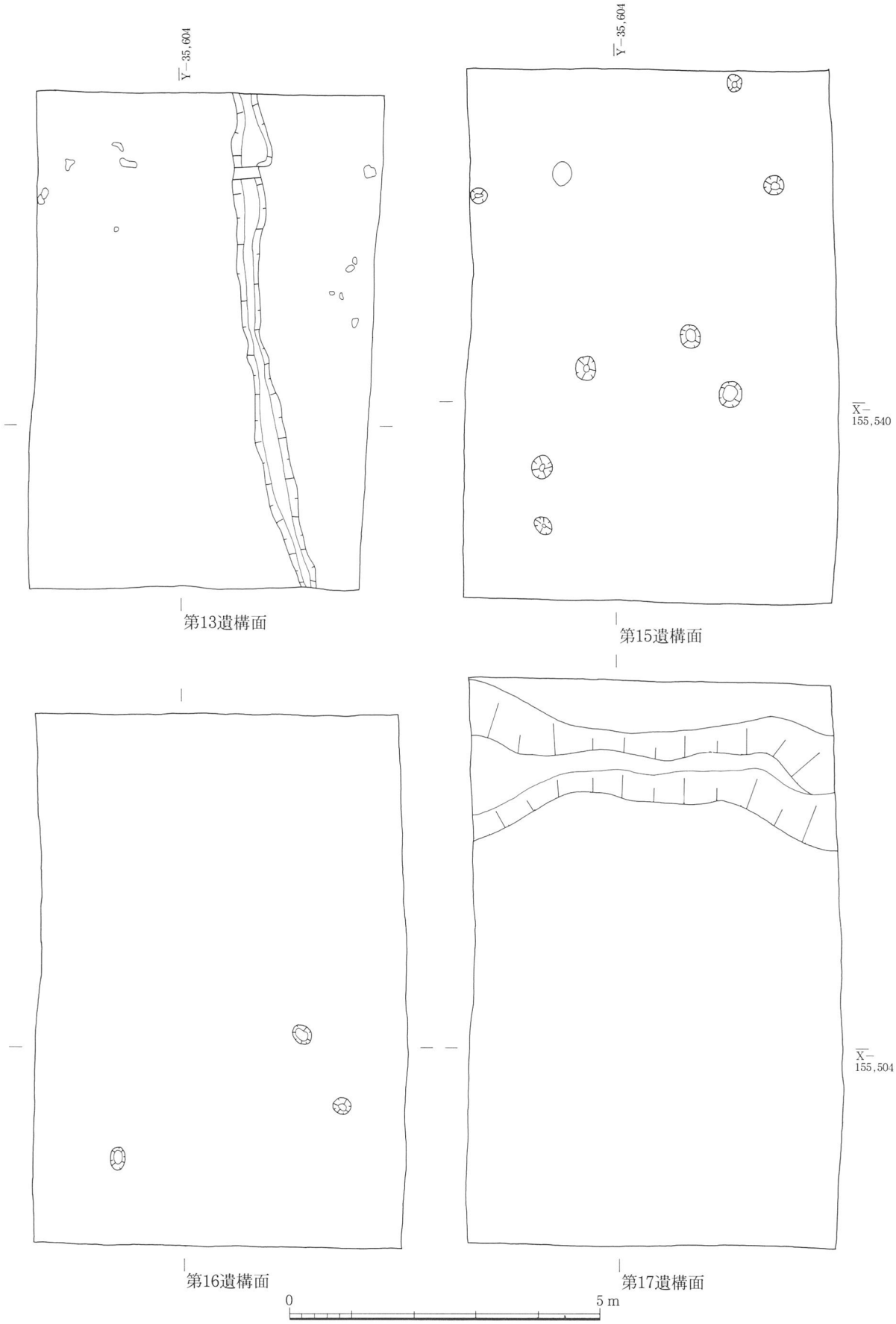



図57　96－3区第13～17遺構面

# 第４章　自然科学的調査

## 第１節　志紀遺跡（その４）における土地利用状況に関する検討

はじめに

志紀遺跡は河内平野南部の旧大和川の活動により形成された自然堤防西側の後背湿地に位置している。これまでの発掘調査の結果、縄文時代晩期から近世に至る遺物・遺構が確認されており、河川の氾濫や洪水の影響を頻繁に受ける場所にありながら、累々とその土地が利用されてきたことが確認されている。また、本遺跡の西側の微高地に位置する田井中遺跡では弥生時代前期の集落跡が確認されており、本遺跡との関係が推定されている。このことは、発掘調査と平行して実施された植物珪酸体分析などの微化石分析結果からも追証されている。

今回は、志紀遺跡（その４）96－１区の堆積物の成因と土地利用状況（例えば水田耕作土の状態など）に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析調査を実施する。調査方法としては、現地での堆積物の観察、堆積物の土壌薄片および軟Ｘ線写真による微細な堆積構造の把握、堆積物の多寡（物理・化学性）を土壌理化学分析により検討したので、以下に報告する。

１．調査地点

調査地点は、96－１区東壁の北端（第１地点）である。調査地点の現地調査による層序区分および発掘調査成果を図58に示す。現地調査時の観察結果による堆積学的な単位での層序区分は、発掘調査時に設定されている層序区分とほぼ対応している。そこで、本報告では調査時に設定された堆積層名を使用して報告する。以下に各単層の岩質、堆積相、考古学調査結果について述べる。なお、層厚は図58を参照されたい。また、記載内容はおもに現地調査での観察に基づくため、粒度分析結果などと若干くいちがいを生じているが了承されたい。[(1)]

１層：細粒砂質シルト質粘土層。上方細粒化の傾向を示す。上部は生物擾乱の影響を受ける。植物遺体片や耕作基盤にみられるうん管・糸状酸化鉄が全体に認められる。本層上面では13世紀の条里水田や近世の遺構が確認されており、第１面と呼ばれている。

２層：細粒砂質シルト質粘土層。上方細粒化の傾向を示す。上部は生物擾乱の影響を受ける。糸状・うん管状酸化鉄が認められる。

３層：シルト質粗粒～細粒砂層。うん管状の酸化鉄が密度高く発達する。

４層：粗粒～細粒砂層。水平葉理・層理をなし、上方細粒化の傾向にある。

５層：微粒～細粒砂質シルト質粘土層。上方やや細粒化の傾向を示す。全体的に生物擾乱の影響が及んでいる。酸化鉄の沈着も著しい。本層上面では11～12世紀と考えられる条里水田が確認されている（第２面）。また、本層上部から平安京１期中段階（８世紀末から９世紀初頭）に位置する須恵器坏、中部から８世紀末～11世紀前に存する可能性がある鉄鏃が出土している。

６層：シルト質粗粒砂層。生物擾乱が著しい。本層上面では９世紀前後とみられる条里水田が確認されている（第３面）。

７層：シルト混じり砂礫層。上方細粒化の傾向にあり、部分的にシルトブロックを含む。中・下部で

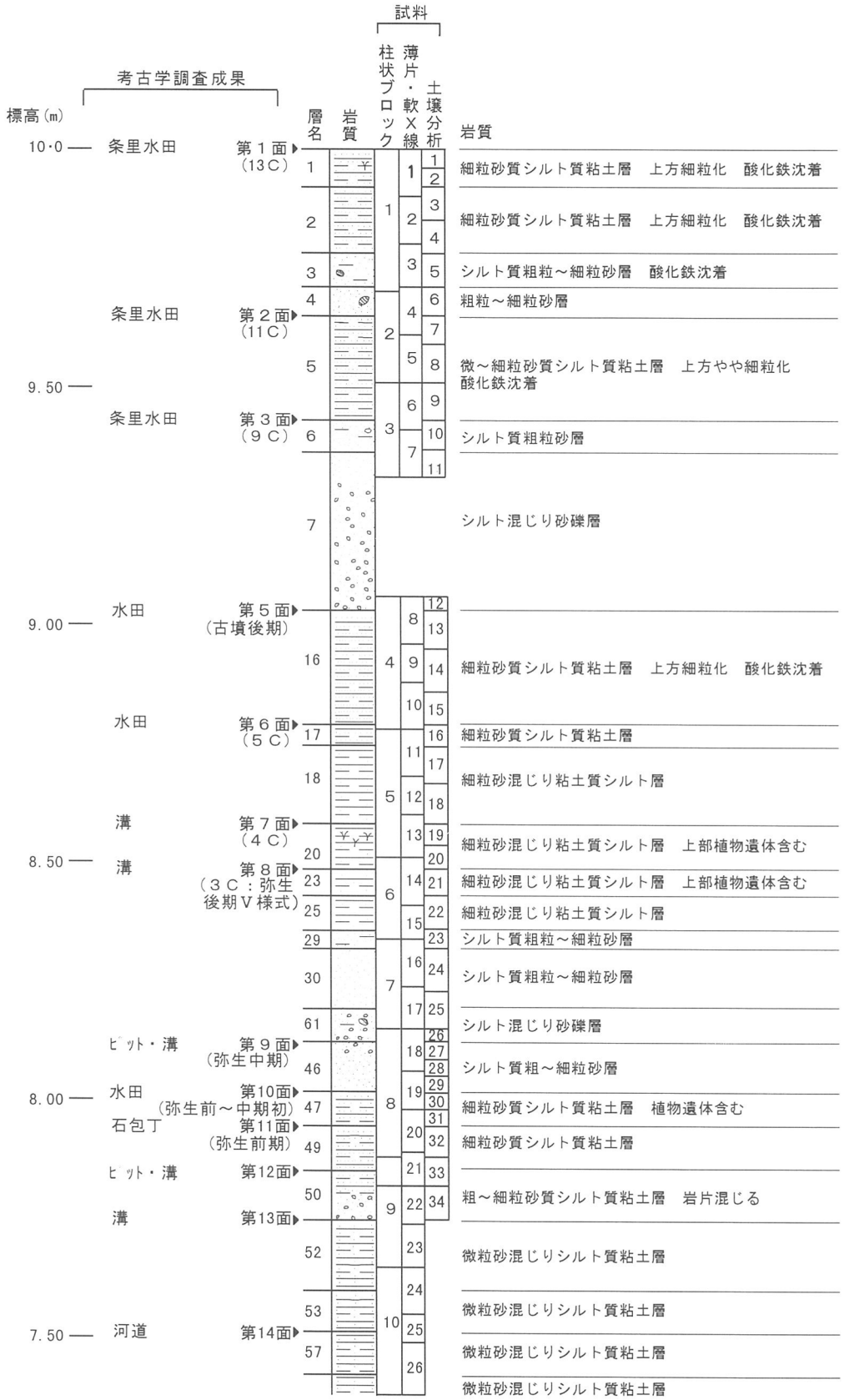



図58　第1地点堆積物の岩質および試料採取層準

はトラフ型斜交葉理が発達する。調査区の広い範囲を覆っている。本層は調査区南部で認められ6世紀後半～7世紀の畦畔、土坑、足跡、甑が確認されている第4面の堆積物を侵食している。

16層：細粒砂質シルト質粘土層。上方に向けてやや粗粒化する傾向がある。本層上面では、6世紀前半と考えられる大畦畔、溝、足跡、大畦畔に伴う杭などの遺構が確認されている（第5面）。

17層：細粒砂質シルト質粘土層。上方細粒化の傾向にある。うん管状の酸化鉄が認められる。本層上面では、5世紀代と考えられる大畦畔、溝、足跡、ピットなどの遺構が確認されている（第6面）。

18層：細粒砂混じり粘土質シルト層。淘汰度は比較的良い。

20層：細粒砂混じり粘土質シルト層。部分的ではあるがラミナ構造が認められる。このラミナの構造葉理には植物遺体からなるものがある。本層上面では布留式土器の時期に属する溝、土坑などが確認されている（第7面）。

23層：細粒砂混じり粘土質シルト層。第Ⅴ様式の段階の溝2条が確認されている（第8面）。

25層：細粒砂混じり粘土質シルト層。植物遺体を含む。

29層：シルト質粗粒～細粒砂層。

30層：シルト質粗粒～細粒砂層。岩片を含み、全体的に多孔質である。

61層：シルト混じり砂礫層。

46層：シルト質粗～細粒砂層。本層上面では弥生時代中期の溝、ピットが確認されている（第9面）。また、本層からは縄文時代晩期の土器片、弥生時代前期の土器片、弥生時代中期（Ⅱ様式）の土器片、サヌカイトの石鏃が出土している。

47層：細粒砂質シルト質粘土層。植物遺体含む。本層上面では、弥生時代前期～中期初頭の畦畔、溝、足跡、耕作痕、ピットなどの遺構が確認されている（第10面）。本層からは弥生時代前期の石包丁、サヌカイトの石鏃が出土する。

49層：細粒砂質シルト質粘土層。本層上面では弥生時代前期と考えられる落ち込み状遺構、溝状遺構が確認されている（第11面）。本層中より石槍が出土している。

50層：細礫まじる粗～細粒砂質シルト質粘土層。上方細粒化の傾向にあるが、全体的に淘汰は悪い。岩片混じる。本層上面では弥生時代前期と考えられるピット、溝が確認されている（第12面）。

52層：微粒砂混じりシルト質粘土層。粘性が強く、有機質を含む。水平ラミナ構造が比較的発達する。上部はロード構造を示す。本層上面では弥生時代前期と考えられる溝状遺構、ピット、土坑が確認されている（第13面）。

53層：微粒砂混じりシルト質粘土層。粘性が強く、有機質を含む。水平ラミナ構造が比較的発達する。

57層：微粒砂混じりシルト質粘土層。水平ラミナ構造が認められる。本層上面では本遺構（その3）との比較より、縄文時代晩期と推定される河道跡が確認されている（第14面）。

## 2．分析方法

### （1）軟X線写真撮影

土層断面より採取した大型ブロック試料から、縦7～10㎝、横5㎝、厚さ1㎝のブロック試料を採取し、撮影試料とした。撮影は、株式会社ニッテツファインプロダクツの協力を得て、X線透影装置（SOFTEXM－150WM）を使用して、電圧120KVP、電流7mAの条件で撮影した。撮影した写真を印画紙に焼き付けて、堆積相の構造等について検討した。

（２）土壌薄片作製観察

土壌断面より採取した大型ブロック試料から、縦７～10㎝、横５㎝、厚さ１㎝のブロック試料を採取、これを研磨し土壌薄片を作製した。作製した試料は試料番号４・６・11・19である。以下に作製工程を述べる。

試料はまず80℃で１日間乾燥した後、樹脂（ペトロポキシおよびシアノボンド）で固化する。固化した試料は、一次研磨－80℃乾燥－樹脂による再固化－二次研磨を経て片面の研磨を終了、室温で約１時間の減圧乾燥をした後、スライドガラスにスーパーセメダインで接着する。二次切断をしてもう片方の面を研磨、乾燥した後、カナダバルサムによりカバーグラスを接着する。最後に仕上げ整形を行い完成させる。

（３）土壌理化学分析

粒径組成・土性はピペット法－国際法粒径区分（山根，1984)、腐植（有機物）含量はチューリン法（土壌標準分析・測定法委員会，1986)、ジチオナイト可溶の鉄・マンガンはジチオナイト溶液抽出－原子吸光光度法（L.P.van Reeuwijk,1986）でそれぞれ行った。

以下に各項目の操作工程を示す。

１）分析試料の調製

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜φのふるいを通過させる（風乾細土)。この一部を細かく粉砕し、0.5㎜φのふるいを全通させる（粉砕土)。風乾細土の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。

２）粒径組成

風乾細土試料10.00ｇに蒸留水と30％過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、水を約500mℓ加え、撹拌しながら30分間音波処理を行う。この液を１ｌ沈底瓶に移し、分散剤を加える。往復振とう機で１時間振とうした後、水で１ｌに定容する。沈底瓶を１分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に５㎝の深さから懸濁液10mℓを採取する。採取懸濁液を湯煎上で蒸発乾固し、乾燥・秤量する（シルト・粘土の合量)。さらに所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を５㎝の深さから10mℓ採取し、蒸発乾固・乾燥・秤量する（粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土をサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残査を乾燥・秤量する（砂含量)。これを0.2㎜φふるいでふるい分け、ふるい上の残留物を秤量する（砂含量中の粗砂含量)。

以上の測定値をもとに粗砂・細砂・シルト・粘土４成分の合計を100とする各成分の重量％を求める。

３）腐植含量

粉砕土試料0.100～0.500ｇを100mℓ三角フラスコにとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mℓを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2％フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第１鉄アンモミウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（０rg－C乾土％）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量を算出する。

４）ジチオナイト可溶鉄・マンガン（ＤＣＢ－Ｆｅ、Ｍｕ）

粉砕土試料0.50ｇにＤＣＢ抽出液30mℓを添加して25℃の条件下で16時間振とうする。振とう後、0.4％高分子凝集剤を２滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、原子吸光光度計により鉄（Fe)、マンガン（Mn）の濃度を測定する。これらの測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄（$Fe_2O_3$)、マンガン（Mn0%）の含量をそれぞれ求める。

## 3．結果

### 3－1．軟Ｘ線写真・土壌薄片観察結果

軟Ｘ線写真および土壌薄片の観察の結果、上記した現地調査時の層序観察では確認されなかった微細な構造が確認された。微細構造の状態については写真図版１～５に示す。これらの観察に基づく堆積相を図59に模式化して示す。各単層ごとに記載する。

１層：細粒砂質シルト質粘土層。水平葉理が比較的良好に認められる。植物根が認められ、その密度は高い。生物擾乱の影響が認められるが顕著ではない。本層上面は13世紀の条里水田面となっているが、明瞭な作土層は認められない。おそらく、本層を覆う砂層堆積時に侵食されているものと思われる。また、粘土からなる数㎜程度のブロック土が混入している。

２層：堆積相は１層とほぼ同様である。水平方向の間隙には泥が充填している。生物擾乱による水平葉理の破壊は１層に比較して強い。また、根の密度は低くなる。

３層：シルト質粗粒～細粒砂層。水平葉理が認められるが、生物擾乱により乱れる。ブロック土を含む。植物根の密度は高くなる。

４層：粗粒～細粒砂層。再堆積したブロック土を含む。葉理構造は下部で良く保存されている。

５層：微砂～細粒砂質シルト質粘土層。水平葉理構造が認められており、現地調査時には区分できなかったが、本層中には１㎝程度の単層が数枚認められる。これら単層のうち、上部の単層には数㎜程度のブロック土が認められる。また、中部の単層は生物擾乱により層理面が変形している。また、下部の単層には微粒砂～細粒砂が充填する乾痕が認められる。一時的にせよ、調査地点が干上がったことが窺える。本層上面では11～12世紀と考えられる条里水田が確認されている（第２面）が明瞭な耕作土層は認められない。これは、耕作期間が短かった、あるいは上位の砂層の堆積により侵食されている可能性がある。

６層：シルト質粗粒砂層。生物擾乱が著しく、粒団が認められる。各々の粒団は部分接合をなすことから、作土層と認定される。本層上面では９世紀前後とみられる条里水田が確認されていることから、その耕作によるものとみられる。

16層：細粒砂質シルト質粘土層。堆積構造は全体的に変形している。この変形構造は下部がロード構造で、その上位がフレーム構造で、垂直方向に連続している。地震による変形構造とみられる。地震の発生時期は遺物より６世紀前半以降とみられる。本層上面では、６世紀前半と考えられる大畦畔、溝、足跡、大畦畔に伴う杭などの遺構が確認されている（第５面）ものの、耕作による撹乱状況は認められない。

17層：細粒砂質シルト質粘土層。堆積構造は全体的に変形している。この変形構造も地震動による可能性がある。本層上面では、５世紀代と考えられる大畦畔、溝、足跡、ピットなどの遺構が確認されている（第６面）。

18層：細砂混じり粘土質シルト層。堆積構造は下部で変形しており、この変形は下位の20層上部まで連続する。本変形構造も地震によると考えられる。

20層：細粒砂混じり粘土質シルト層。上部は地震により変形しているが、下部は成層している。したがって、地震の発生時期は遺物の出土状態から４世紀～５世紀の頃と考えられる。

23層：細粒砂混じり粘土質シルト層。現地調査時には区分できなかったが１㎝程度の単層からなり、

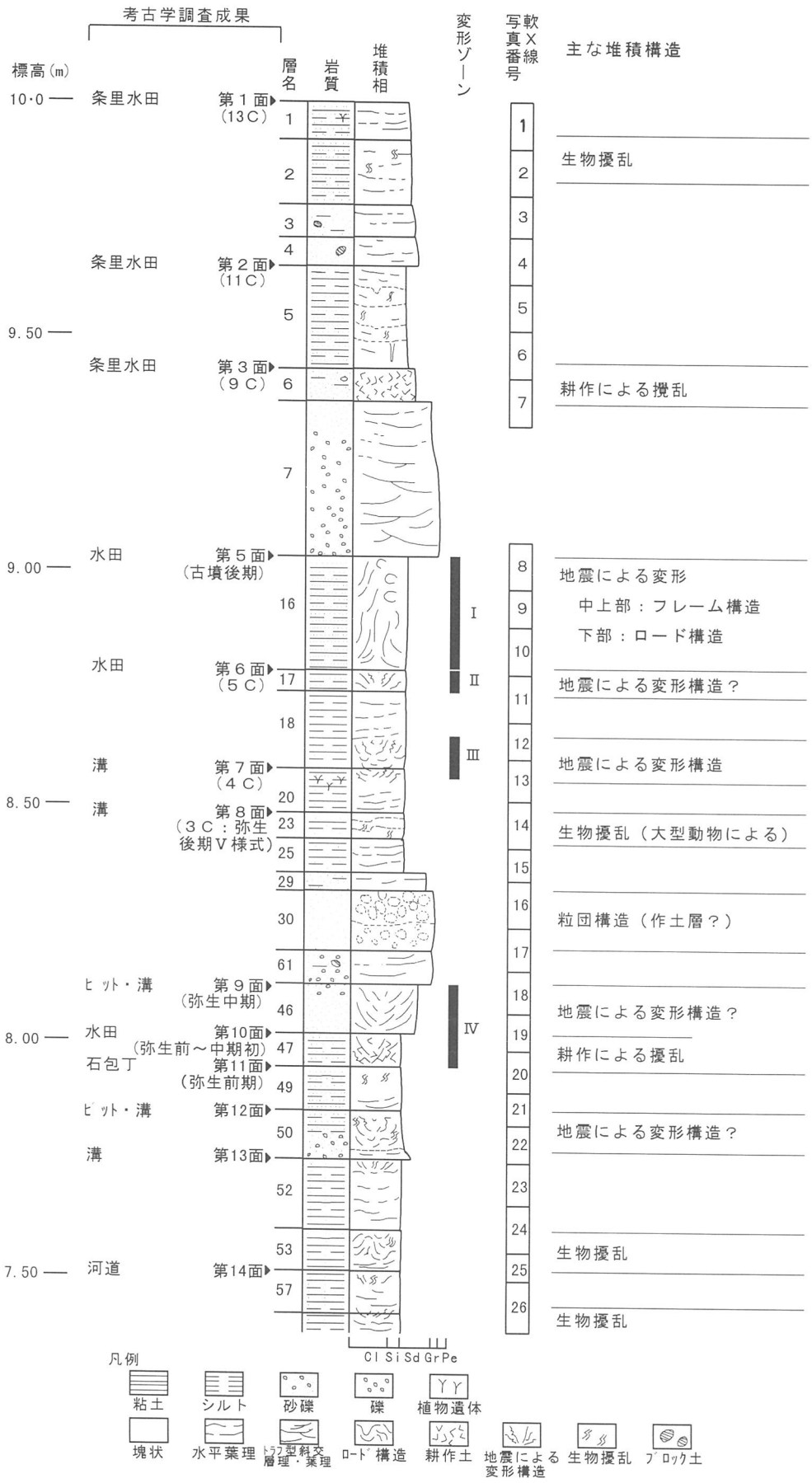



図59　軟Ｘ線写真・土壌薄片観察による堆積相

いずれも生物擾乱の影響が認められる。本層上面では弥生時代後期の遺構が確認されているが、本層中に認められた単層上部が遺構面であった可能性がある。

25層：細粒砂混じり粘土質シルト層。成層しており、水平葉理が認められる。

29層：シルト質粗粒～細粒砂層。成層しており、水平葉理が認めれる。

30層：シルト質粗粒～細粒砂層。５～10㎜程度の粒団が認められる。各々の粒団は部分的に接合する場合がある。粒団の周りには植物痕とみられる間隙が認められる。このような構造は畑地の耕作によって生じた可能性が強い。また、粒団を構成する砂は本層下位の砂礫層を材料として構築されている可能性が強い。本層上面では遺構が確認されていないが、堆積構造からは人為的撹乱が及んでいる可能性が強い言える。

61層：シルト混じり砂礫層。成層しており、ブロック土の混入が認められる。上部は乱れる。

46層：シルト質粗～細粒砂層。全体的に変形しており、本層下位の47層まで及ぶ。この変形構造は人為的な撹乱の影響ともみられるが、構造自体が大きいこと、下部（20層上部）の構造がロード構造のようにみえることから、地震による変形構造の可能性が強い。地震だとすればその発生時期は弥生時代中期から後期にかけての時期とみられる。

47層：細粒砂質シルト質粘土層。全体的に変形しており、ロード構造様を呈する。また、粒団が認められることから作土層と認定される。本層上面では水田等の遺構が確認されていることから、その耕作による擾乱とみられる。

49層：細粒砂質シルト質粘土層。全体的に生物擾乱が認められており、その構造の大きさから人間活動によるものとみられる。本層上面で弥生時代前期と考えられる落ち込み状遺構、溝状遺構等が確認されていることから、当時の人間活動による可能性がある。

50層：細礫まじる粗～細粒砂質シルト質粘土層。全体的に変形しており、本層下位の52層上部まで連続する。ロード構造を呈しており、地震動による変形であることが推定される。本層上面では弥生時代前期と考えられるピット、溝が確認されているが、人間による撹乱の影響はほとんど認められない。

52層：微粒砂混じりシルト質粘土層。上部では上層から連続する変形構造が認められる。その下位は水平葉理構造が認められ、下部では生物擾乱により乱れる。また、植物の痕が認められる。本層上面では弥生時代前期と考えられる遺構が認められるが、人間による明瞭な撹乱状況は認められるない。

53層：微粒砂混じりシルト質粘土層。構造は上部で変形しており、下部は成層している。上部の変形は生物擾乱による可能性と、地震による可能性の両方が考えられる。人間による撹乱状況は認められない。

57層：微粒砂混じりシルト質粘土層。上部の構造は変形している。変形の規模が小さいことから生物擾乱によるものと考えられる。下部は成層しており、水平葉理が、認められる。

### ３－２．土壌理化学分析

#### （１）結果

分析結果を図60に示す。

##### １）堆積物の粒径組成

第13～第11面が設定された50層から49層にかけては、上位ほど砂特に細砂が少なくなり粘土が多くなるという上方細粒化の傾向が認められる。その上位の47層では、上部も下部も49層上部とほぼ同様の粒

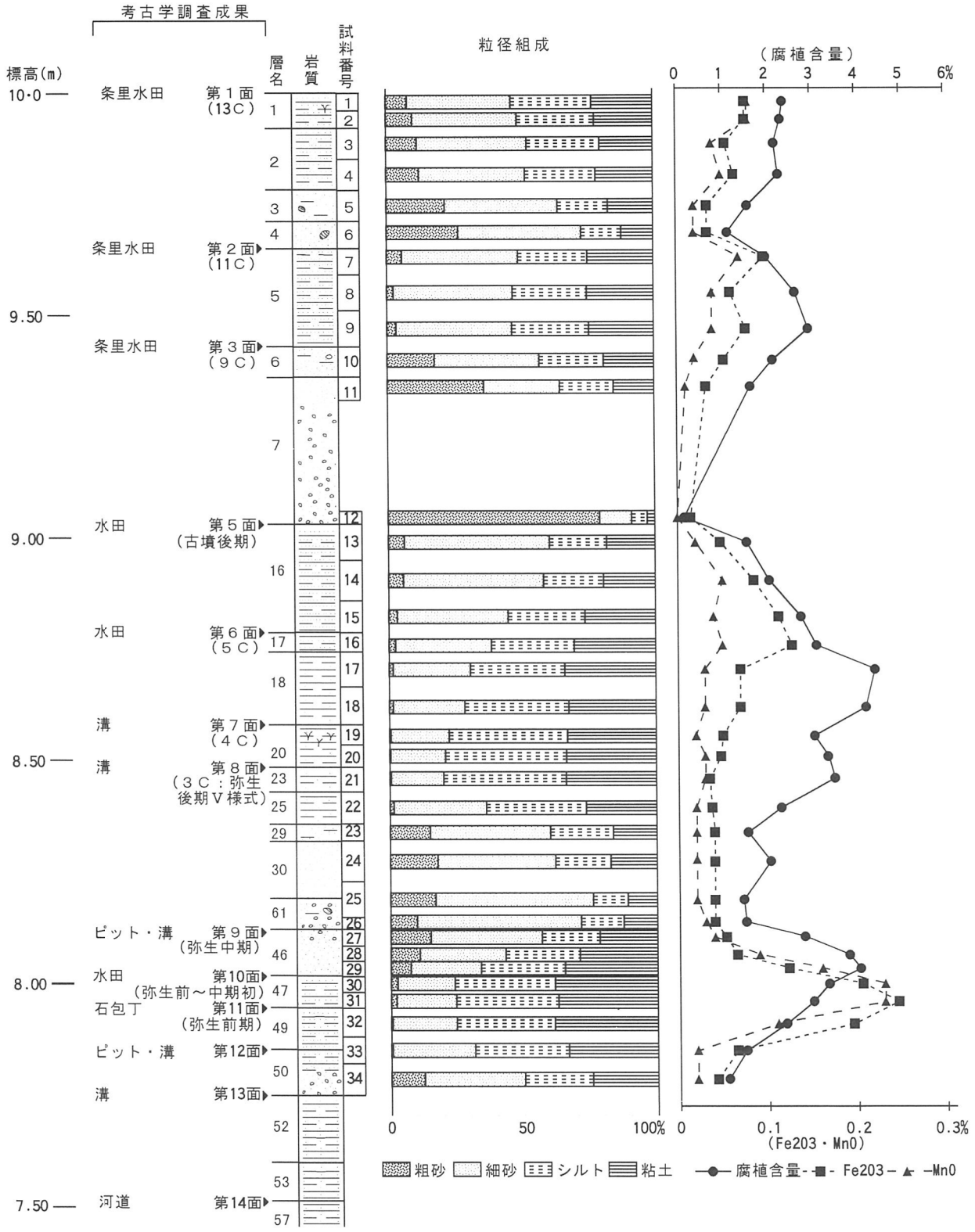



図60　土壌理化学性の層位的変化

径組成であり、層位的な粒度の変化はない。第９面を挟む46層と61層では、上位ほど細砂含量の卓越する上方粗粒化が顕著である。30層および29層では、細砂含量が卓越し、また粗砂含量も比較的多い。その直上の25層では、粗砂細砂とも下位の層より少なくなり、シルトおよび粘土含量が多くなる。さらに上位の23層および20層では、さらにシルトおよび粘土含量が多くなる。第８面を挟むこの層位内での変化はほとんどない。第７面から第５面にかけての18～17層では、上位に向かって主に細砂が増えてシルトが減る上方粗粒化の傾向が認められる。第５面を境として、上位の７層では粗砂が主体となるが、上部では粗砂含量は減少、第３面のある６層では細砂の方が多くなる。第３面と第２面に挟まれた５層は細砂含量の多い堆積層である。大型ブロック試料の観察などでは、上方細粒化が不明瞭ながら認められたが、粒径組成の層位的な変化はあまり顕著でない。第２面を境としてその上位の４層では、下位に比べて粗砂が急に多くなるが、さらに上位の３層から２層下部にかけて粗砂含量は減少し、シルトおよび粘土含量が増加する上方細粒化の傾向が認められる。２層および１層は細砂がシルトや粘土よりやや多い砂質の堆積層である。各層とも上方細粒化が認められたが、粒径組成の変化はほとんどない。

２）堆積物の理化学的性質

50層および49層下部においては、腐植含量、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量がともに低い傾向にあるが、49層上部により上位に向かってこれらの値は増加し、第11面直上の47層下部でＤＣＢ可溶Fe、Mn含量が極大値を示し、第10面直上の46層下部で腐植含量が極大となる。46層中部から上部にかけては、腐植含量、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量ともに上位に向かって減少し、第９面直上の61層下部でこれらの値は極小となる。第９面と第８面との間の61層から23層にかけては、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量が全体的に低く、明瞭なピークの認められない層位である。一方、腐食含量は、30層中部に小さな極大が確認され、29層より上位に向かって増加する。第８面と第７面に挟まれた20層では、下位の層と同様にＤＣＢ可溶Ｆe、Mn含量が低い値であるが、腐植含量は比較的高い。ただし、第７面直上の20層上部では極小が認められる。第７面と第６面の間の18層および17層では、ＤＣＢ可溶Mn含量は低いが、ＤＣＢ可溶Fe含量はやや高い傾向にある。両値ともに、第６面直下の17層で極大を示す。腐植含量は高く、18層上部において明瞭な極大を示す。第６面と第５面に挟まれた16層では、腐植含量、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量ともに上位に向かって減少し、第５面直上の７層最下部では、全て極小となる。７層最上部では、３つの値とも最下部よりは多く、６層では上位に向かって増加傾向を示し、第３面直上の５層下部ではどの値も極大となる。５層中部から４層にかけては、腐植含量は減少傾向を示し、第２層直上の４層では極小となるが、他の２つの値は第２面直下の５層上部で極大を示し、４層では極小となる。３層から２層下部にかけては、腐植含量、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量ともに上位に向かって増加し、２層下部においては腐植含量、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量ともに弱い極大が認められる。

（２）考察

粒径組成（あるいは粒度組成）は、土壌の生成過程を反映した最も基本的な性質であり、人為や堆積などによる多量の砂や粘土の混入がない限り短期間で変化することはなく、土壌の物理性を支配するとともに、化学性や生物性とも密接な関連を持つと言われている（永塚・大羽，1988）。

本調査地点では泥（シルトおよび粘土）の多い組成を示す試料は、各水田面のすぐ下位に認められる傾向がある。現水田耕作においても、栽培期間中に水を貯留させるために細粒質なシルト、粘土を主体とした土壌が利用されており、粒径組成の面からは水田の土壌環境として本地点が満足できる状態であったと思われる。

一方、堆積物の理化学的性質のうち、腐植含量は当時の栽培、潅水による作土への有機物の富加を、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量は非晶質マンガンおよび一部の結晶質マンガンを抽出することから水田跡の判定や過去の土壌水分状況などの埋没状況を推定する上で重量な根拠となる。一般的に排水性の良い潅漑性湿性土壌（乾田、半乾田）では作土で還元された鉄、マンガンは下層に溶脱され、酸化的な下層土で酸化・沈殿することから作土層直下で鉄、マンガンの集積が認められるが、排水性の悪い地下水湿性土壌（半湿田、湿田）では明瞭な集積層を持たないものが多い。

今回の分析結果では46層下部、18層上部、５層下部、２層および１層において腐植含量が高く、極大を示すことから、これらの層について作土層としての可能性が指摘される。また、46層下部および18層上部については直下の試料においてＤＣＢ可溶Fe、Mn含量が高い傾向にあることから潅漑性湿性土壌（乾田、半乾田）である可能性が高いと考えられる。さらに、30層および23層については、腐植含量は高いが下層土のＤＣＢ可溶Fe、Mn含量が低いことから地下水湿性土壌（半湿田、湿田）の可能性が強いものと推察される。

一方、５層下部、２層下部、１層は、腐植含量、ＤＣＢ可溶Fe、Mn含量ともに高く、また17層、５層上部についてはＤＣＢ可溶Fe、Mn含量のピークが確認されるが水田跡としての判断が難しく、肉眼観察による鉄・マンガンの斑紋の形態観察とあわせた水田跡の検証が必要である。鉄の膜状斑あるいは管状斑が形成されている場合は自然条件下で形成された可能性が強く、マンガンの点状斑、鉄の雲状斑あるいは糸根状斑が形成されている場合は水田跡の有力な根拠となる。

## ５．考察

調査地点の古環境は、57～49層が湿地（後背湿地）、47層が乾燥することのある湿地、46～61層が湿地、30層で乾燥した土地（干上がる）、29～７層が湿地、６層が乾燥した土地、５～１層が湿地と変化したことが推定される。本遺跡は氾濫原における後背湿地のような場所であったが、河川の氾濫や洪水等により、粗粒な堆積物が堆積したおりには、湿地は干上がり高燥な場所となったことが推定される。このような土地条件の変化は当時の人間に多少なりとも影響を与えたことが推定される。発掘調査時に確認された水田は、第３面のもの以外は湿田であったことが推定される。

水田の耕作土層が明瞭に確認されたのは、第３面と第10面である。それ以外の水田面では明瞭な耕作土層は認められなかった。この原因としては、上位の層の堆積時に侵食された可能性と、耕作期間が短かった可能性などが考えられる。土壌理化学分析結果を見る限り、作土層直下でピークを示す酸化鉄やマンガンの集積が遺構面で確認されていることを考慮すると、前者の可能性が考えられる。ただし、第３面より上位の堆積物は、構造や粒径等から堆積速度が早かったことが推定されることから、耕作期間が短かったのも否めない。今後、植物珪酸体分析などの微化石分析を実施することにより検証したい課題である。

本地点では、地震による堆積物の変形するゾーンが、はっきりしたもので５つのゾーンが確認された。その時代性は、下位より、弥生時代前期の頃、弥生時代中期の頃、４世紀の頃、５世紀の頃、古墳時代後期の頃である。このうち、４世紀頃の地震動は、本遺跡跡92－Ａ区Ⅲ層で確認されている（大阪府教育委員会，1993）ものに対比される可能性がある。また、それ以外の地震痕についても、河内平野中部で確認されている地震痕（例えば、財団法人東大阪市文化財協会，1997）との対比ができそうであり、平野中部と南部の同一時間面を設定する上でも貴重な成果といえる。

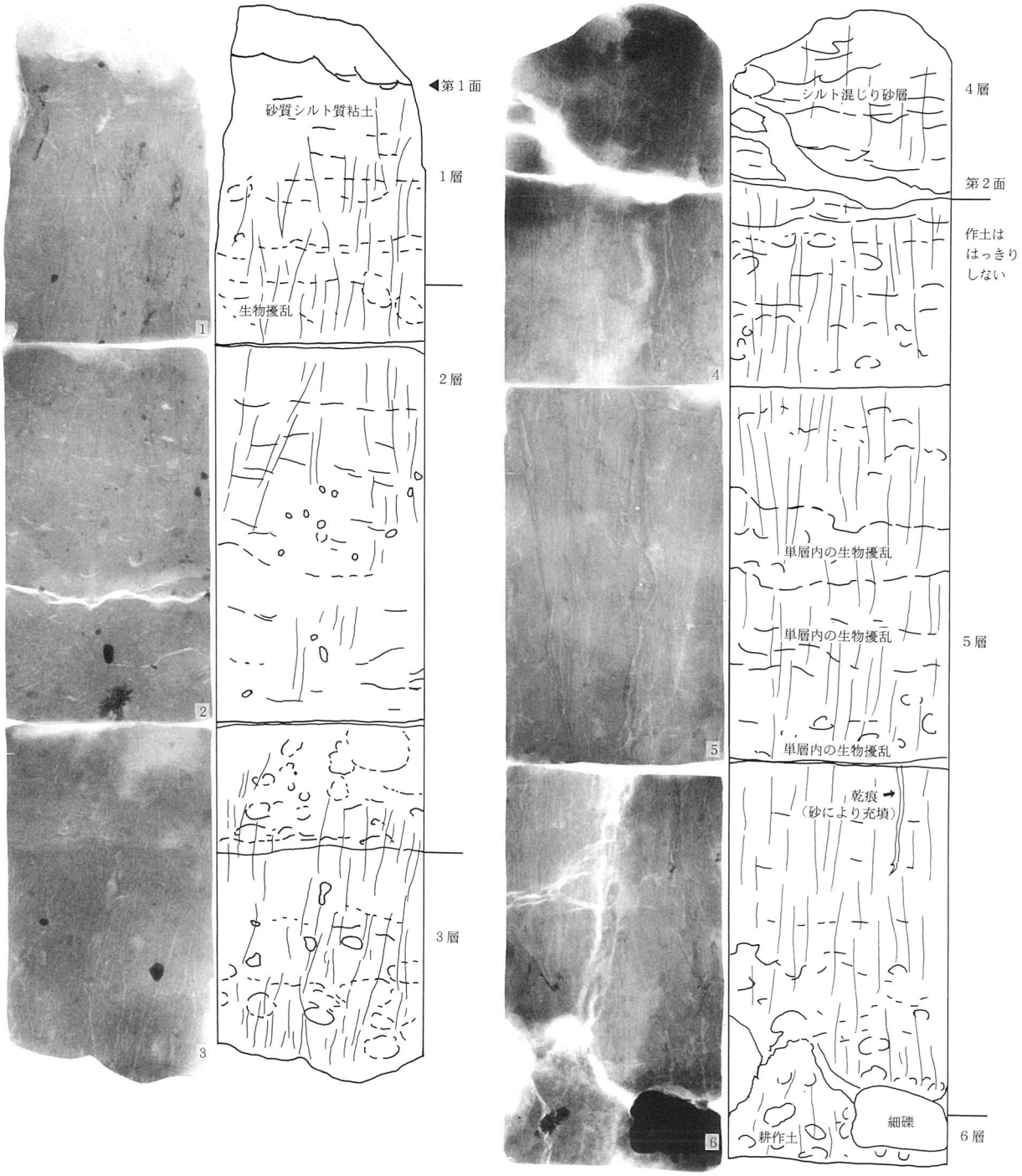
（1）調査区南壁は掘削の進展に伴い随時とりはずした。そのため資料採取は最後まで残した調査区東壁で行った。したがって層名は第3章第1節とは必ずしも一致しない。南壁にあっても東壁にない層名があり、その逆もある。本節の記述における層名と遺物取り上げ単位の層名との対比は下記のとおりである。

| | |
|---|---|
| 第2層－1・2 | 第12層－25・29・30・61 |
| 第3層－3・4 | 第13層－46 |
| 第4層－5 | 第14層－47 |
| 第5層－6 | 第15層－49 |
| 第6層－7 | 第16層－50 |
| 第9層－16 | 第17層－52 |
| 第10層－17・18 | 第18層－53 |
| 第11層－23 | 第19層－57 |

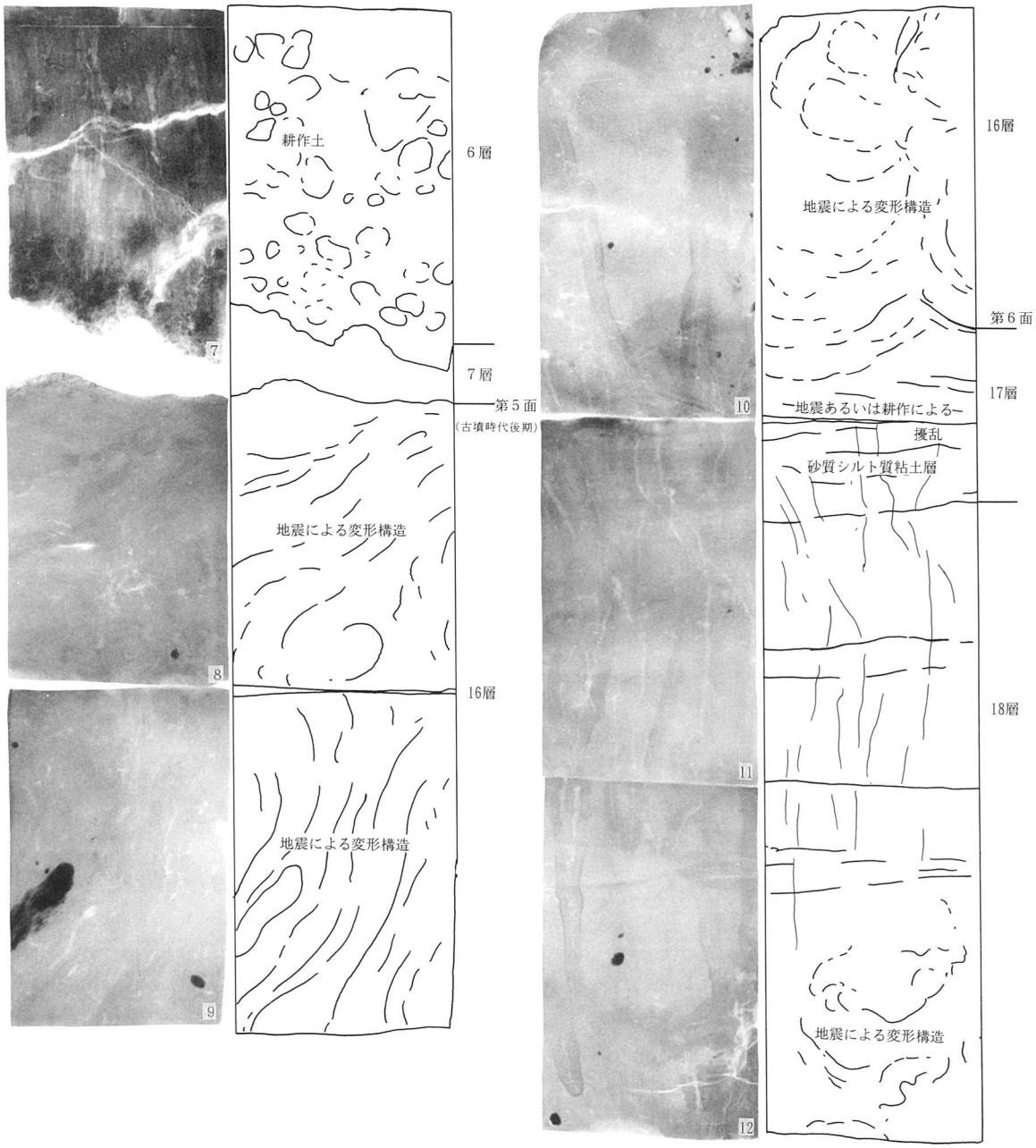
〈参考文献〉

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）『土壌標準分析・測定法』. 354p.,博友社.
永塚鎮男・大羽裕（1988）『土壌生成分類学』. 338p.,養賢堂.
L.P.van Reeuwijk（1986）『PROCEDERES FOR SOIL ANALYSIS』, p106.,International Soil Reference and Information Centre.
大阪府教育委員会（1993）志紀遺跡発掘調査概要・III. 63p.
日本第四紀学会編（1993）『第四期試料分析法』, p556.,東京大学出版：p119－124.
山根一郎（1984）粒径組成（粒径分布）. 『環境科学実験法』, 237p.,博友社：p.196－199.
財団法人　東大阪市文化財協会（1997）鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作地跡と地震層序－国道170号線被服団地前交差点立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第38時発掘調査報告一, 29p.

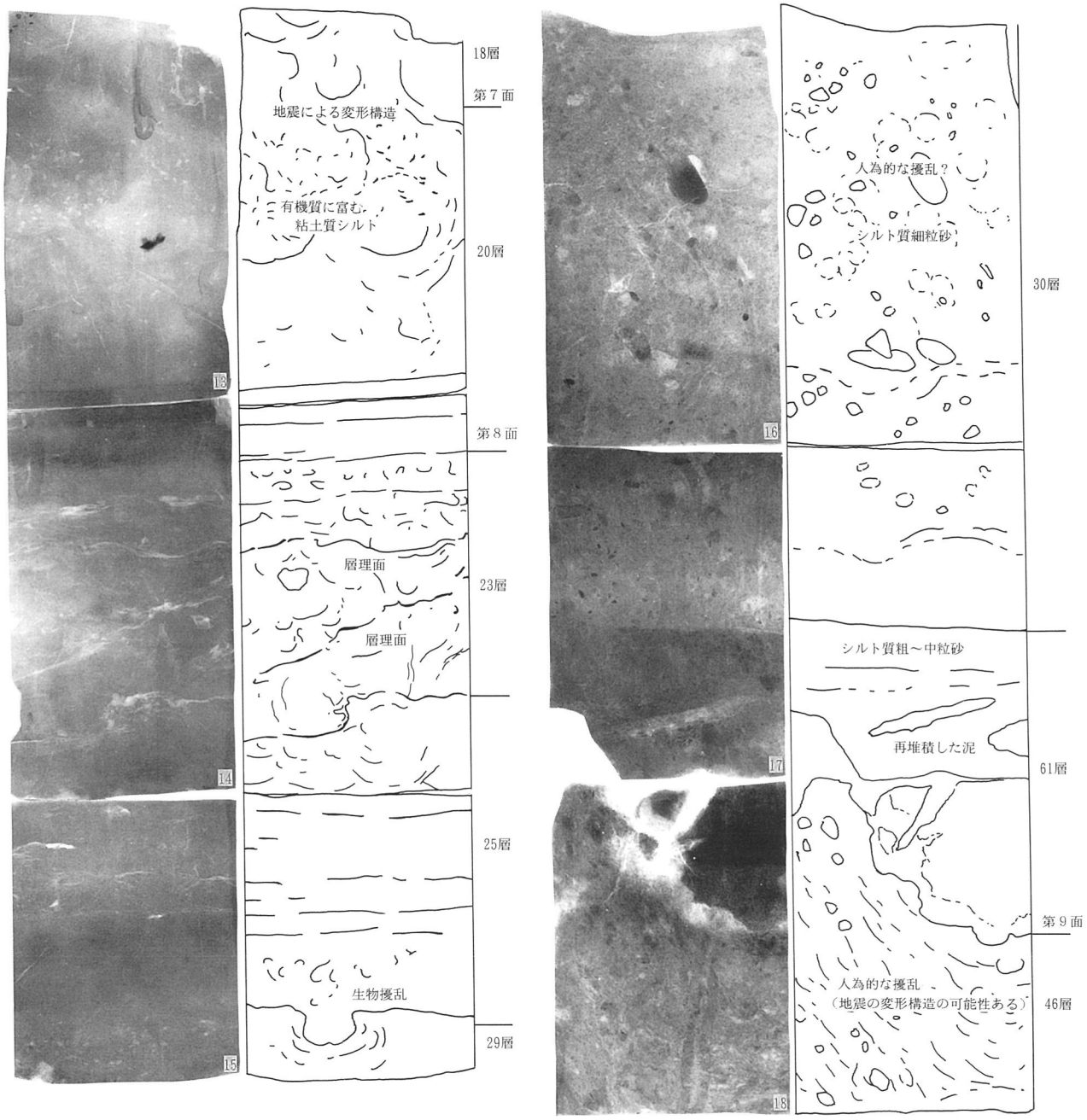
図版１　堆積物の軟Ｘ線写真（１）



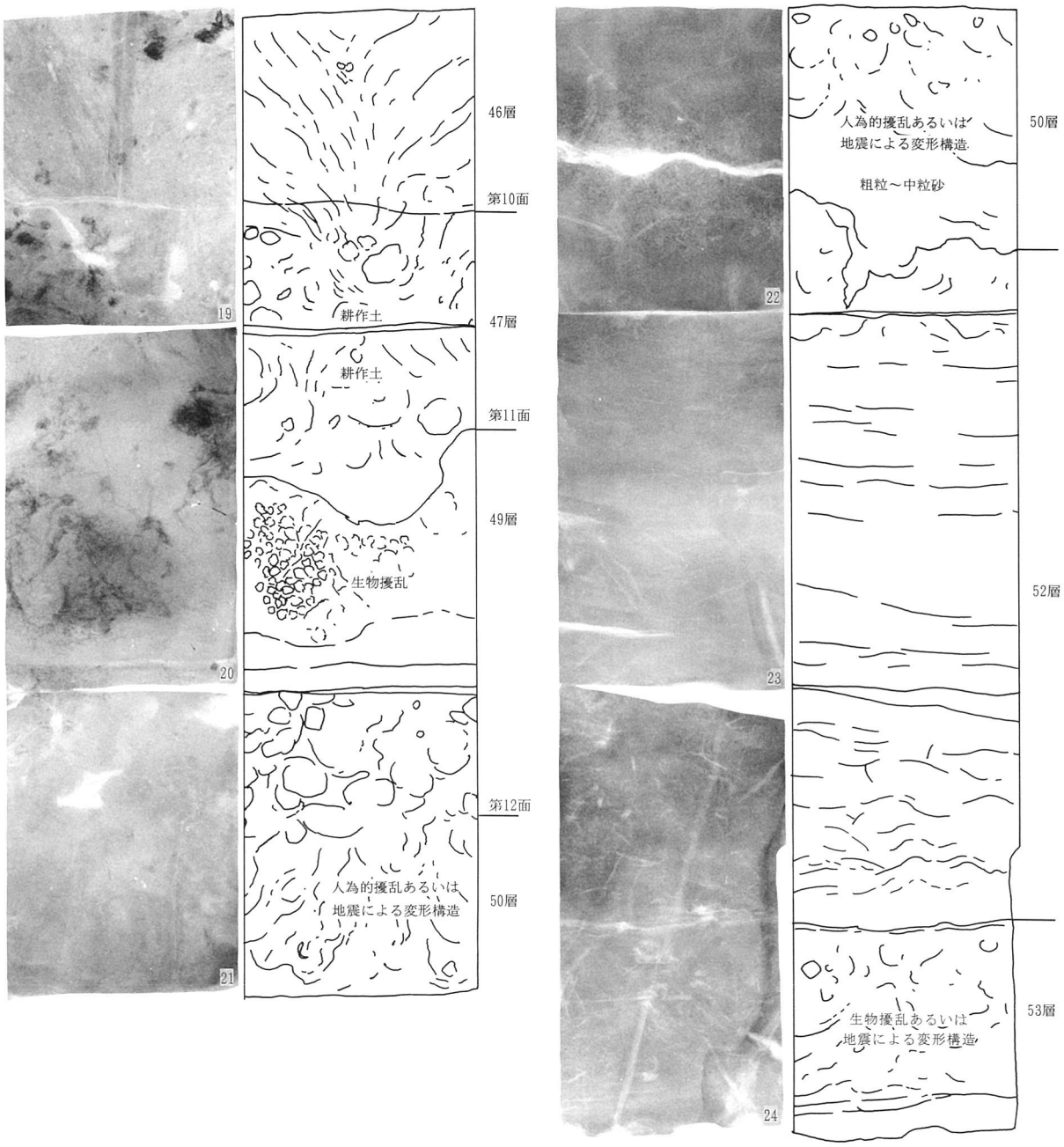
図版２　堆積物の軟Ｘ線写真（２）



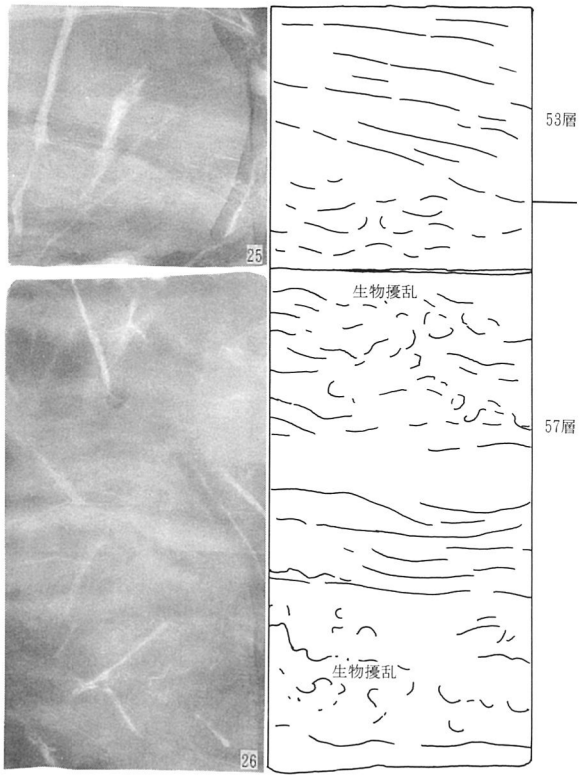
図版３　堆積物の軟Ｘ線写真（３）

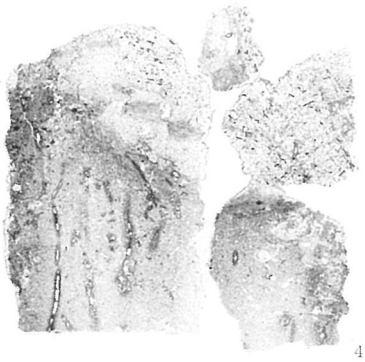


図版４　堆積物の軟Ｘ線写真（４）



図版５　堆積物の軟Ｘ線写真（５）・土壌薄片写真




シルト混じり砂層

耕作土は
はっきり
とらえられない

17層

地震あるいは耕作による
擾乱

18層

←乾痕が認められる

５層　植物根の密度高い

６層　耕作土
粒団構造

46層

人為的な擾乱
（地震の変形構造の
可能性もあろ）
第９面

47層
耕作による擾乱

## 第２節　志紀遺跡出土植物遺体について

志紀遺跡の縄文晩期?から中世にわたる広範囲の遺構から、出土した植物遺体について報告する。なお、同定した植物遺体について、以下の通り分類した。

［裸子植物］

１．イチイ科　Taxaceae　　カヤ　*Torreya nucifera*

２．スギ科　Taxodiaceae　　スギ　*Cryptomeria japonica*

［被子植物］

１．クルミ科　Juglandaceae　　クルミ属　*Juglans* sp.

２．クルミ科　Juglandaceae　　オニグルミ　*Juglans ailanthifolia*

３．ブナ科　Fagaceae　　アカガシ亜属　*Quercus*(*Cyclobalanopsis*) sp.

４．ブナ科　Fagaceae　　コナラ亜属　*Quercus*(*Lepidobalanus*) sp.

５．バラ科　Rosaceae　　サクラ属　*Prunus* sp.

６．バラ科　Rosaceae　　スモモ　*Prunus salicina*

７．バラ科　Rosaceae　　ウメ　*Prunus mume*

８．バラ科　Rosaceae　　モモ　*Prunus persica*

９．トチノキ科　Hippocastanaceae　　トチノキ　*Aesculus turbinata*

この同定結果や花粉分析の結果から、縄文晩期から中世までの古環境復原を目指してみたが、検出された箇所が限られていること、局地的な古環境復原は可能と考えられるが全体像を把握するにはいたらなかった。また、志紀遺跡の特徴として古環境復原を行なうには、データ数が少ないので同定結果表で報告する。多数出土した栽培植物であるモモの核について計測し、その値から見た解析結果を掲載した。

表３　出土植物遺体同定表

| 登録番号 | 地区 | 遺構面 | 遺構名 | 層　名 | 時　期 | 同定結果 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 212 | | 第３遺構面 | | ４－２層 | ９世紀 | ｽｷ毬果１個、ｻｸﾗ属核１個 |
| 213 | | 第３遺構面 | | ４－２層 | ９世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 358 | I-10-FL | 第４遺構面 | | ５層 | ６世紀後半～７世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 359 | I-10-IL | | | ４層 | ９世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 360 | I-10-HN | 第４遺構面 | | ５層 | ６世紀後半～７世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 361 | I-10-GE | 第４遺構面 | | ５層 | ６世紀後半～７世紀 | ﾓﾓ核２個 |
| 373 | I- 9-GY | 第４遺構面 | SK4001 | | ６世紀後半～７世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 434 | I-10-IL | | 南壁 | ４層 | ９世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 439 | I-10-FW | 第５遺構面 | 精査時 | ８層 | ６世紀前半 | ﾓﾓ核１個 |
| 442 | I-10-GH | 第５遺構面 | 精査時 | | ６世紀前半 | ﾓﾓ核１個 |
| 458 | I-10-GT | 第５遺構面 | 精査時 | | ６世紀前半 | ﾓﾓ核２個、ｽﾓﾓ核１個 |
| 538 | I-10-EH | 第５遺構面 | | | ６世紀前半 | ﾓﾓ核半分１個 |
| 614 | I-10-FF | 第６遺構面 | | ９層 | ５世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 652 | I-10-GV | | | 10層 | ４世紀～５世紀 | 不明 |
| 658 | I-10-EU | | | 10層 | ４世紀～５世紀 | ﾓﾓ核半分１個 |
| 735 | I-10-EG | | | 10層 | ４世紀～５世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 740 | I-10-GF | | 畦畔付近 | 10層 | ４世紀～５世紀 | ﾓﾓ核１個 |
| 765 | I-10-GE | 第７遺構面 | SD703 | | | ｳﾒ核１個 |

| 登録番号 | 地区 | 遺構面 | 遺構名 | 層　名 | 時　期 | 同 定 結 果 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 841 | I-10-FU | | | 12層 | 弥生中期末 | ﾓﾓ核１個 |
| 948 | I-10-GF | 第10遺構面 | | | 弥生中期末 | ﾓﾓ核１個 |
| 1189 | I- 9-FY | | 河道？ | 18層（砂層） | 縄文晩期？ | ﾄﾁﾉｷ果皮片３個 |
| 1190 | I-10-FA | | 河道？ | 18層（砂層） | 縄文晩期？ | ﾄﾁﾉｷ果皮３個、種皮片２個、ｺﾅﾗ亜属殻斗２個ｸﾙﾐ属核２個、ｱｶｶﾞｼ亜属殻斗６個、果皮４個、ｶﾔ種子１個 |
| 1191 | I-10-FB | | 河道？ | 18層（砂層） | 縄文晩期？ | ｸﾙﾐ属核１個、ｱｶｶﾞｼ亜属果皮１個、殻斗２個、ﾄﾁﾉｷ果皮２個、ｺﾅﾗ亜属殻斗１個 |
| 1192 | I-10-FE | | 河道？ | 18層（砂層） | 縄文晩期？ | ｸﾙﾐ属核１個 |
| 1193 | I-10-FF | | 河道？ | 18層（砂層） | 縄文晩期？ | ﾄﾁﾉｷ果皮１個 |
| 1202 | | 第14遺構面 | 河道3 | | 縄文晩期？ | ｸﾙﾐ属核１個、ｵﾆｸﾞﾙﾐ 核１個、ﾄﾁﾉｷ果皮片２個ｺﾅﾗ亜属果皮１個 |
| 1203 | I-10-HQ | 第14遺構面 | 河道2 | | 縄文晩期？ | ｱｶｶﾞｼ亜属幼果４個、果皮１個、ﾄﾁﾉｷ果皮３個 |

表４　出土モモ核計測表

| 登録番号 | 長さ | 幅 | 厚さ | 体　積 |
|---|---|---|---|---|
| 8 | 2.444 | 2.073 | 1.719 | 4.558 |
| 12 | 2.314 | 1.834 | 1.462 | 3.247 |
| 34 | 2.819 | 2.301 | 1.727 | 5.862 |
| 67 | 3.279 | 2.530 | 1.785 | 7.750 |
| 79 | 2.650 | 2.023 | 1.631 | 4.576 |
| 90 | 3.349 | 2.361 | 1.909 | 7.899 |
| 120 | 2.639 | 2.006 | 1.592 | 4.411 |
| 133 | 2.972 | 2.217 | 1.576 | 5.434 |
| 153 | 2.452 | 1.997 | 1.569 | 4.021 |
| 174 | 2.555 | 2.043 | 1.651 | 4.510 |
| 174-2 | 2.929 | 1.998 | 1.405 | 4.303 |
| 316 | 2.286 | 2.000 | 1.404 | 3.359 |
| 337 | 2.192 | 2.204 | 1.707 | 4.316 |
| 358 | 2.236 | 1.841 | 1.391 | 2.997 |
| 359 | 2.293 | 1.598 | 1.256 | 2.409 |
| 360 | 1.923 | 1.679 | 1.375 | 2.323 |
| 361 | 2.276 | 1.973 | 1.655 | 3.889 |
| 410 | 2.255 | 2.133 | 1.791 | 4.508 |
| 419 | 1.939 | 1.659 | 1.201 | 2.018 |
| 422 | 2.342 | 2.017 | 1.625 | 4.017 |
| 425 | 2.766 | 2.152 | 1.588 | 4.947 |
| 425-2 | 2.439 | 2.102 | 1.578 | 4.234 |
| 430 | 2.299 | 1.773 | 1.595 | 3.402 |
| 431 | 2.392 | 2.123 | 1.634 | 4.343 |
| 434 | 2.537 | 1.560 | 1.267 | 2.624 |

| 登録番号 | 長さ | 幅 | 厚さ | 体　積 |
|---|---|---|---|---|
| 435 | 2.410 | 1.964 | 1.548 | 3.834 |
| 436 | 2.518 | 1.947 | 1.605 | 4.118 |
| 438-1 | 2.160 | 1.862 | 1.589 | 3.345 |
| 438-2 | 2.220 | 1.924 | 1.648 | 3.684 |
| 439 | 1.962 | 1.454 | 1.279 | 1.909 |
| 442 | 2.298 | 2.008 | 1.550 | 3.743 |
| 456 | 2.601 | 2.271 | 1.841 | 5.691 |
| 457-1 | 2.170 | 1.906 | 1.487 | 3.219 |
| 457-2 | 2.248 | 1.999 | 1.576 | 3.706 |
| 457-3 | 2.043 | 1.849 | 1.565 | 3.094 |
| 458-1 | 2.693 | 2.648 | 1.994 | 7.441 |
| 458-2 | 1.913 | 1.513 | 1.120 | 1.696 |
| 471 | 2.819 | 2.147 | 1.452 | 4.599 |
| 614 | 2.057 | 1.999 | 1.669 | 3.592 |
| 735 | 2.488 | 2.014 | 1.581 | 4.146 |
| 841 | 2.828 | 2.289 | 1.578 | 5.346 |
| 908 | 3.008 | 2.525 | 1.986 | 1.986 |
| 71 | 2.990 | 2.315 | 1.720 | 1.720 |
| | | | | |
| 最小値 | 1.913 | 1.454 | 1.120 | 1.696 |
| 最大値 | 3.349 | 2.648 | 1.994 | 7.899 |
| 合計 | 106.003 | 86.831 | 67.881 | 172.826 |
| 平均値 | 2.465 | 2.019 | 1.579 | 4.019 |
| 標準偏差 | 0.353 | 0.263 | 0.191 | 1.456 |
| 標準誤差 | 0.054 | 0.040 | 0.029 | 0.222 |

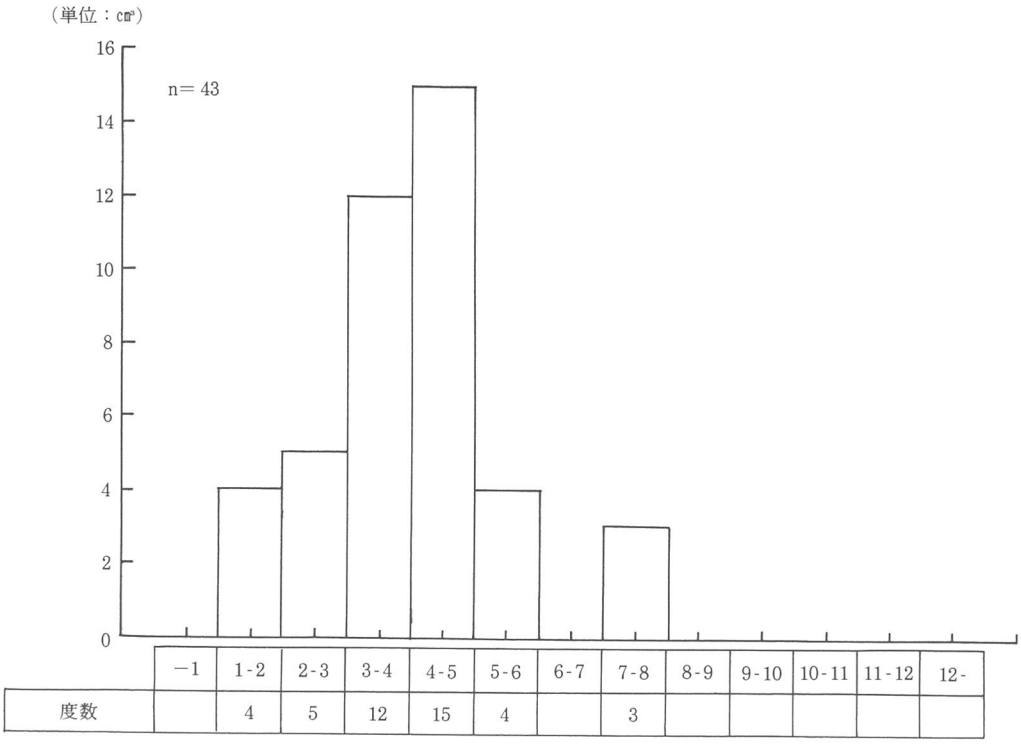



図61　出土モモ核の体積変動ヒストグラム（度数＝個数）

図61のモモ核体積（㎤）の変化は、弥生時代中期から中世までいろんな種類のモモを植樹していた事実を証明しており、特に体積４～５㎤のモモが15個と多く、最小は1.696㎤で最大は7.899㎤であった。このグラフの棒一群がモモの一品種を示しており、弥生前期から中世にいたるまで６種類のモモが栽培されていたと考えている。

この地域は大和川付替え以前玉串川と長瀬川に分流するところであるから、これらの河川が影響していると考えられる。

なお、河道遺構から出土する種実類や過去の花粉分析の結果から遺跡付近の古環境を考えてみると、縄文晩期から５世紀後半までの丘陵から山麓にかけてアカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布し、山腹ではコウヤマキ属、スギ属を要素とする中間温帯林、山頂付近にはブナ属を要素とする冷温帯林が分布していたと考えられる。

また遺跡内は畑や水田が広がっており、イネ、モモ、ウメ、スモモなどを栽培していたと考えられる。

〈参考文献〉

大井次三郎．北川政夫．1983．新日本植物誌　顕花編．至文堂，東京．

大阪府教育委員会．1993.付章Ⅰ．志紀遺跡（第５次調査－Ａ区、第６次調査－Ａ区）におけるプラントオパール分析および花粉分析．志紀遺跡発掘調査概要・Ⅲ．43－51

## 第３節　志紀遺跡から出土した動物遺体

志紀遺跡から出土した動物遺体の保存状態は悪く、種の同定ができたものは５片で、その全てがウマであった。出土部位は歯の破片が多く、長骨は脛骨の骨幹が同定できた。

志紀遺跡から出土した動物遺体の学名

奇蹄目　Perissodatyla　　ウマ科　Equidae　　ウマ　*Equus caballus*

表５　出土動物遺体同定表

| 登録番号 | 地区 | 遺構面 | 遺構名 | 層　名 | 同　定　結　果 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | I- 4-WX | 第２遺構面 | | | ウマ　左右不明　上顎臼歯１、その他臼歯の破片 | |
| 5 | I- 4-XX | 第２遺構面 | | | ウマ　右　脛骨　骨幹のみ | |
| 31 | I-10-A | | | ２層 | ウマ　左　上顎臼歯　１＋ | 第４小臼歯or第１大臼歯or第２大臼歯 |
| 55 | I-10-GV | | | ３層直上 | ウマ　左上顎第３大臼歯　１ | |
| 56 | I-10-IV | | | ３層直上 | ウマ　右上顎第３大臼歯 | |
| 168 | I-10-FK | | | ４－１層 | ウシorウマ　長骨の骨幹 | |
| 463 | I- 9-GX | | | ９層 | 不明　大型哺乳動物　長骨骨端 | |

# 第５章　まとめ

## 第１節　志紀遺跡の変遷

### １　はじめに

当然のことながら志紀遺跡は単独で存在するはずはなく、周辺遺跡との有機的関係の中で成立している。だから、集落遺跡にはそれに対応すべき生産遺跡が存在するはずである。志紀遺跡は生産遺跡であり、南側にある弥生時代の拠点集落遺跡である田井中遺跡と大きな関係があるとされている。しかしこの関係は弥生時代から古墳時代に限定されることであり、以降については必ずしも成立せず、別の関係が成立する。志紀遺跡の水田遺構は、弥生時代前期から鎌倉時代まで検出されており、広い意味での志紀遺跡の変遷を探るためには、同時代の他の関係を有していた遺跡、古墳時代以降鎌倉時代に至るまで志紀遺跡と関係を持つ集落遺跡、同様の生産遺跡等がどこに存在するかを探らねばならない。その可能性を、最も近くに存在するという理由から木の本遺跡と老原遺跡にとりあえず求めたい。本来であれば、例えば弥生時代であれば、暫定的であれ拠点集落であろう田井中遺跡を中心とした５㎞圏内に存在する諸遺跡を抽出し、それらが空間的にどういう位置をしめ、その空間性に相応するどのような機能を果たしていたかを、古墳時代であればその集落を中心にしたあり方を、条里施行以降であれば条里景観でのあり方をそれぞれ明確にせねばならないのであるが、今回は時間的都合により少々手間を省いた。以下で、志紀遺跡を中心にしながら、時期をおおよそ弥生時代から鎌倉時代に限定して、周辺の遺跡との関係のなかでの志紀遺跡の変遷を概観してゆく。その方法として、今回の報告データ及び既存のデータを基にして、それらを各遺跡の個性と各遺跡を横断する時間性の枠組みという２つの観点から見てゆくことにする。また、志紀遺跡と田井中遺跡との呼称区分であるが、行政区分ではいささか面倒なので、弥生時代においては基本的に生産域を志紀遺跡、集落域を田井中遺跡とする。遺跡という名称自体当時の空間をあらわすには不適当な単語ではあるが、他に適切な呼称もないのでこれを使用することとする。

### ２　志紀遺跡の概要

志紀遺跡では、弥生時代前期に一部の調査区（Ｓ17.20）でピット列が検出されており、集落域であった可能性も考えられるが、調査によって明らかになっている弥生時代前期から鎌倉時代のほとんどの時期において生産域であったし、それ以降もそうであったと考えられる。

〔弥生時代〕各面はおよそT.P5.3～7.2mの範囲内で検出される。当時に形成されたと考えられる黒色粘土層や供給された洪水砂層等は複数の調査区で確認されているが、遺物の少なさが災いし時期比定の一致を見いていない。ただし、志紀遺跡北側でT.P6.2～6.5mで見られる黒色粘土層（Ｓ09等）は中河内一帯で確認できるとされている層で、池島・福万寺遺跡の第４黒色粘土層に対応する可能性がある。

志紀遺跡で検出される最古の水田面は、弥生時代前期中段階である。但しこの時期の水田は限られた部分でしか営まれていなかったようである（Ｓ17）。志紀遺跡全域で水田が営まれるようになるのは、弥生時代中期初頭（第Ⅱ様式）である。以降の中期については遺構の検出は不良であるが、これは、水田が行われていなかったからではなく、土壌化層の連続であるからと考えられる。後期については上面が洪水砂に覆われている部分があり、良好に検出できることがある。弥生時代後期以降古墳時代前期にかけての面は多くの調査区で検出されている。この面は同一であるとされることが多いが、これが完全

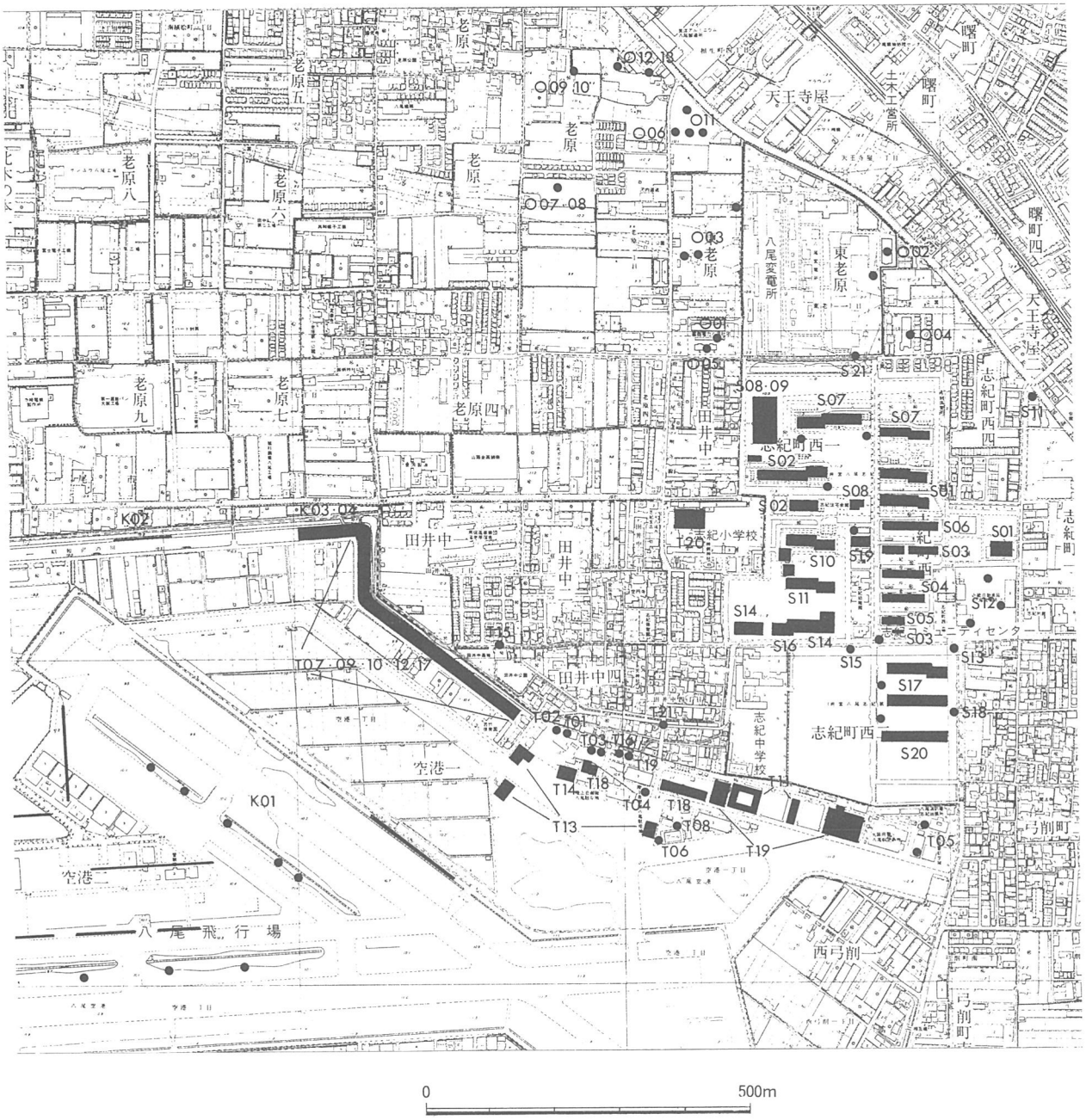



図62　志紀遺跡周辺調査位置

に同一面であるかはともかく、この時期に洪水堆積物の供給が少なかったことは確かであろう。

〔古墳時代〕中期や後期の面は洪水砂層にパックされていることが多く、面の認識は比較的容易であり、特に後期の面はT.P9.0m前後で検出される面で、志紀遺跡一帯で見られる洪水砂層を除去し検出できる面である。この洪水砂層は従来「奈良期洪水砂層」と呼ばれていたもので、完全に同時に供給されたものではないだろうが、ほぼ同時期に供給されたものであろう。各調査区によってやはり差異があるものの、6世紀後半～7世紀の時間が与えられている。なお、この洪水砂の時期については、近年の調査成果で問題点が出てきており、そのことについては次で述べる。

〔古代〕S17調査区では、従来「奈良期洪水砂層」と言われていた層の上面で飛鳥時代の面が検出された。結果この洪水砂の時期は古墳時代後期以降飛鳥時代となりやや古くなりそうだが、この洪水砂層を

表６　志紀遺跡周辺調査一覧表

| 年度 | 調査名 | 報告書 | 刊行年 | 記号 |
|---|---|---|---|---|
| 志紀遺跡 | | | | |
| 1983 | 府教委１次 | 未刊 | | S01 |
| 1985 | 府教委２次 | 『志紀遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 | 1986 | S02 |
| 1985 | 八文研田井中３次 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』（財）八尾市文化財調査研究会報告40 | 1994 | S03 |
| 1986 | 八文研田井中４次 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』（財）八尾市文化財調査研究会報告40 | 1994 | S04 |
| 1987 | 八文研田井中６次 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』（財）八尾市文化財調査研究会報告40 | 1994 | S05 |
| 1988 | 八文研田井中８次 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』（財）八尾市文化財調査研究会報告40 | 1994 | S06 |
| 1988 | 府教委３次 | 「八尾市志紀遺跡の水田遺構」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第21回）資料』 | 1990 | S07 |
| 1989 | 府教委４次 | 未刊 | | S08 |
| 1990 | 府教委５次 | 『志紀遺跡発掘調査概要Ⅳ』大阪府教育委員会 | 1995 | S09 |
| 1991 | 府教委６次 | 『志紀遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会 | 1992 | S10 |
| 1991 | 府教委７次 | 『志紀遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会 | 1992 | S11 |
| 1991 | 市教委91-319 | 『八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25 | 1992 | S12 |
| 1992 | 八文研田井中９次 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1993）』（財）八尾市文化財調査研究会報告39 | 1993 | S13 |
| 1993 | 府文協（その１） | 『志紀遺跡－大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書』府文協報告第91輯 | 1995 | S14 |
| 1993 | 八文研志紀１次 | 「Ⅵ　志紀遺跡（第１次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告42』 | 1994 | S15 |
| 1994 | 府文協（その２） | 未刊 | | S16 |
| 1994 | 府文協（その３） | 未刊 | | S17 |
| 1995 | 八文研志紀２次 | 「ⅩⅠ　志紀遺跡（第２次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告50』 | 1996 | S18 |
| 1995 | 府文セ（防） | 『田井中遺跡（１～３次）・志紀遺跡（防１次）』府文セ報告第23集 | 1997 | S19 |
| 1996 | 府文セ（その４） | 『志紀遺跡（その４）』府文セ報告第25集（本書） | 1998 | S20 |
| 1996 | 八文研志紀３次 | 『平成８年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1997 | S21 |
| 田井中遺跡 | | | | |
| 1982 | 八文研１次 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 | T01 |
| 1984 | 八文研２次 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告17 | 1989 | T02 |
| 1986 | 八文研５次 | 『田井中遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告46 | 1995 | T03 |
| 1988 | 八文研７次 | 『田井中遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告46 | 1995 | T04 |
| 1988 | 市教委63-279 | 『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20 | 1989 | T05 |
| 1990 | 市教委90-29-1 | 『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告23 | 1991 | T06 |
| 1990 | 府教委１次 | 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会 | 1991 | T07 |
| 1990 | 市教委90-29-2 | 『八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告26 | 1992 | T08 |
| 1991 | 府教委２次 | 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会 | 1992 | T09 |
| 1992 | 府教委３次 | 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会 | 1993 | T10 |
| 1992 | 八文研10次 | 『田井中遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告46 | 1995 | T11 |
| 1993 | 府教委４次 | 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅳ』大阪府教育委員会 | 1994 | T12 |
| 1993 | 八文研11次 | 『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1994 | T13 |
| 1993 | 八文研12次 | 『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1994 | T14 |
| 1993 | 八文研13次 | 「ⅩⅠ　田井中遺跡（第13次調査）」（財）八尾市文化財調査研究会報告42 | 1994 | T15 |
| 1994 | 府文協（その１） | 『田井中遺跡（１～３次）・志紀遺跡（防１次）』府文セ報告第23集 | 1997 | T16 |
| 1994 | 府教委５次 | 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会 | 1996 | T17 |
| 1995 | 府文セ（その２） | 『田井中遺跡（１～３次）・志紀遺跡（防１次）』府文セ報告第23集 | 1997 | T18 |
| 1996 | 府文セ（その３） | 『田井中遺跡（１～３次）・志紀遺跡（防１次）』府文セ報告第23集 | 1997 | T19 |
| 1996 | 八文研14次 | 『平成８年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1997 | T20 |
| 1996 | 八文研15次 | 『平成８年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1997 | T21 |
| 木の本遺跡 | | | | |
| 1982 | 八文研２次 | 『木の本遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告４ | 1984 | K01 |
| 1987 | 府教委１次 | 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教委 | 1993 | K02 |
| 1988 | 府教委２次 | 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教委 | 1993 | K03 |
| 1995 | 府教委（北豪８次） | 『木の本遺跡発掘調査概要』大阪府教委 | 1996 | K04 |
| 老原遺跡 | | | | |
| 1981 | 市教委1981 | 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』（1980・81年度） | 1983 | O01 |
| 1984 | 八文研１次 | 『昭和59年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告７ | 1985 | O02 |
| 1985 | 八文研２次 | 『昭和60年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告９ | 1986 | O03 |
| 1988 | 市教委63-150 | 『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19 | 1989 | O04 |
| 1988 | 八文研３次 | 『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25 | 1989 | O05 |
| 1988 | 八文研４次 | 『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25 | 1989 | O06 |
| 1993 | 市教委93-260 | 『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告30 | 1994 | O07 |
| 1993 | 八文研５次 | 『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1994 | O08 |
| 1995 | 市教委95-266 | 『八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告34 | 1996 | O09 |
| 1995 | 八文研６次 | 『平成７年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1996 | O10 |
| 1995 | 市教委95-319 | 『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36 | 1997 | O11 |
| 1996 | 市教委96-148 | 『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告37 | 1997 | O12 |
| 1996 | 八文研７次 | 『平成８年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』 | 1997 | O13 |

境にして地形に沿った水田から条里型水田になるというこれまでの見解に変わりはない。なお、今後この洪水砂層を洪水砂層２と呼ぶことにする。飛鳥時代の面はほとんでの調査区で検出されておらず様相は不明であるが、低湿地状をなしていたとされている（Ｓ17)。

以降鎌倉時代の面まで、平安時代の各面（９世紀、11世紀の条里型水田面）が存在する。土壌化層の連続であり各面の検出は困難である。

〔中世以降〕鎌倉時代（13世紀）の面はT.P10.0m前後で検出される面である。上面に洪水砂があり、この面も志紀遺跡一帯で検出される面である。なお、この洪水砂層を洪水砂層１と呼ぶことにする。

鎌倉時代以降については調査対象外となることが多く不明であるが、室町時代以降綿花栽培が行われていたと推定されており（Ｓ14)、島畑等畑地の存在が推定できる。また部分的にではあるが、T.P10.2～10.5mで近世と推定される面が検出されている。（Ｓ02.09.10)。

３　周辺各遺跡の概要

〔田井中遺跡〕田井中遺跡の景観を決定付ける要素は、縄文時代晩期以前に埋没したと考えられる河川による高まりである。田井中遺跡の大部分はこの高まり上に位置し、ここからは、縄文時代晩期以降古墳時代中期頃までの集落域が検出されている。特に弥生時代前期から古墳時代中期にかけての土壌化層は集落中心部で層厚の差こそあれ、良好に検出される。この土壌化層のレベルがT.P8.5～9.5mであり、この層中には複数の遺構面が存在すると推測できるが、著しい土壌化のため検出は困難となっている。志紀遺跡に洪水堆積物が供給されて面が次々と更新されていく一方、田井中遺跡は周囲より微高地になっているため洪水の影響をあまり受けなかった。そして高まり上にも洪水堆積物が供給されるか、もしくは人為的に土が持ち込まれ、その上面が土壌化してゆくことを繰り返し、面が更新されて、良好に検出される土壌化層が形成されていった。この土壌化層に含まれる遺物から推定すると、田井中遺跡には、弥生時代前期中段階以降安定した集落が営まれるようである（亀島氏の遺構群Ｄ、亀島1996)。この集落は後期前半で収束に向かい、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてやや断絶が見られるものの、古墳時代中期まではほぼ同じような場所に集落が営まれているようである。この断絶については近在する八尾南遺跡との関連も考えられよう。また、断絶を境にした前後の集落が性格を異にする可能性もある。古墳時代中期以降については、一部の地域が耕作地になっていた（Ｔ18他）が、志紀遺跡とのレベル差はこの時期なお存在する。また古墳時代後期の集落（Ｔ11）や耕作域の存在も推定されている。この耕作痕跡が検出される部分には、分厚い土壌化層が確認できず、中心部にはほとんど見られない洪水砂が確認できる。飛鳥時代～平安時代については遺構の検出、遺物の出土がなく不明である。上面からの土壌化等により層の認識が難しくなっている可能性があるが、耕作地としての利用も考えられる。鎌倉時代初頭には周辺一体がほぼ平坦化を達成し、この時期には田井中遺跡でも水田等耕作痕跡が検出される（Ｔ11、19)。鎌倉時代以降については、現代の撹乱等で不明であるが、耕作地としての利用がなされていたのであろう。

〔木の本遺跡〕田井中遺跡同様、縄文時代晩期以前に埋没したと考えられる河川による高まりが景観を特徴づけている。この高まりの位置する部分では、田井中遺跡同様、集落機能時に形成された厚い土壌化層を検出している。形成原因は同様の原因によるものだろうが、土壌化層出土の遺物の中心は弥生時代後期から古墳時代中期とやや新しく、この遺跡の集落としての機能時期は田井中遺跡より新しい時期

が中心であると考えられる。この土壌化層のレベルがT.P7.5～8.5mで、田井中遺跡とのレベル差は常に１m程ある。第62図には示されていないが、より西側でも木の本遺跡の調査は実施されており図の端から西へ500m程いった部分の財団法人八尾市文化財調査研究会によるSK83－３調査地点が集落の西端であろう。西には生産域（SK97－70）をはさんで八尾南遺跡が存在する。布留式期の遺構の存在（K02.03）は、それが田井中遺跡からの影響か、八尾南遺跡からのものかで評価がわかれるが、徐々に田井中遺跡から八尾南遺跡へと集落はその関係性を変化させていったようである。遺物は、弥生時代中期以降古墳時代後期までと、奈良（７世紀）時代、平安（10世紀）時代の出土が見られる。奈良・平安の両時代の遺物は遺構に伴うものであり、この時期の集落の存在が推定できるが、その具体的あり方については不明である。

集落が営まれていた高まり部分から南に下った部分（K01）では、上面のみの調査ではあるが条里遺構が検出されており、志紀遺跡同様の土地利用がなされていたと考えられる。

〔老原遺跡〕調査深度の都合、鎌倉時代や平安時代、古墳時代の遺構面を検出している程度である。前述のとおり、鎌倉時代には周囲一帯が平坦化を割合達成していた。老原遺跡では特に北側で鎌倉時代や古墳時代後期の集落が検出されているが、周囲よりも微高地に営まれていた可能性がある。鎌倉時代については居住域と生産域とを区分する溝（O08）の他集落に関する遺構が検出されている（O05.06）。この遺構が条里にどの様に関連してくるかは今後の課題であるが、この溝は坪のほぼ中央を縦断しているものの可能性がある。古墳時代後期については、土坑（O01）・ピット（O09.10）等遺構の他、洪水砂層２から遺物の出土があった。鎌倉時代の遺構面のレベルはT.P9.8～10.5mである。なお、この遺跡に関しては最近渚氏による調査成果の整理が行われている（渚1997）。

## ４　各時期の概要

〔弥生時代〕

前期　集落は、中段階以降田井中遺跡に安定して営まれる。生産域は、ほぼ同時期から志紀遺跡に水田が営まれるが、部分的なものである。

中期　集落は、田井中遺跡を中心に木の本遺跡にも存在する。田井中遺跡は、遺物から推定すると前半に最も栄えるようである。後半の様相については不明瞭であるが、連続的に集落が営まれていたと考えられる。対応する生産域である志紀遺跡は、中期前半から本格的に水田経営が開始される。老原遺跡にも生産域が存在する可能性はある。

後期　集落は、後期前半を境に田井中遺跡が収束に向かい、中期までに比べ遺物量が減少する。そして古墳時代前半までやや断絶しているかのような現象が見られる。生産域は連綿と志紀遺跡に存在し、集落が収束してゆく方向とは別の動きを見せる。

〔古墳時代〕

前期　弥生時代後期以降集落域、生産域の様相は同様である。田井中遺跡は解体したかのようであるが、生産遺跡である志紀遺跡が連綿と営まれていることから、集落の構成員がすべて他所に移動してしまったのではないようである。

中期　集落は、田井中遺跡で弥生時代前期以降後期前半までとほぼ同じ部分に営まれていた集落が収束に向かう。かわって、木の本遺跡で中心的に集落が営まれるようになる。木の本遺跡では、初期須恵器、

韓式系土器等が出土しており、次第に八尾南遺跡との関連が深まっていく様子が窺える。生産域は、志紀遺跡で検出されている。
後期　集落は、田井中遺跡に存在するようであるが、中期までの場所とはことなる。他にも、木の本遺跡や老原遺跡でも遺構が確認できており、集落の存在が推定できる。生産域は、志紀遺跡や老原遺跡で検出されている。
〔古代〕飛鳥時代、奈良時代の集落の様相は、木の本遺跡で奈良時代の井戸が検出されている程度であり不明瞭である。生産域についても同様に不明瞭である。
〔中世〕鎌倉時代　志紀遺跡と田井中遺跡では鎌倉時代の水田が、老原遺跡では鎌倉時代の集落が検出されている。

5　まとめ

以上をふまえ、志紀遺跡の大まかな変遷を述べると以下のようである。まず、弥生時代前期中頃の限られた地区のみでの水田経営が行われはじめ、中期初頭に面的な展開を見せ、以後古墳時代後期まで比較的安定した水田経営が行われる。しかし、飛鳥・奈良時代には断絶があり、平安時代以降条里型水田の展開するというものである。

この発掘調査データに、第4章の自然科学分析や今日までの水田研究成果を加え考えると以下のような流れ、画期があると考えられる。

第1の画期は、弥生時代中期後半である。発掘調査ではほとんど未検出であるが、第4章ではこの時期乾燥した土地が展開していたとされている。この画期以前については、発掘調査により前期中頃の限られた地区のみでの水田経営、中期初頭の面的な展開という発展、差異が確認されている。しかし、中期の状況については発掘調査では不明瞭であり推論ではあるが、この画期以後については中期後半の乾燥した時期にそれ以前よりも広域な水田展開が行われたと考えられる。

これ以降古墳時代前期（布留式期）まで比較的安定した時期が続く。この時期は、洪水堆積物の供給が少なかったことが調査で確認されている。古墳時代中期・後期は、前段階よりやや不安定になるようであるが、それでも水田経営が不可能になるほどではない。この2時期は洪水砂層が、比較的明瞭に検出される。特に後期の面を覆う洪水砂は各地で良好に検出される。この各地で確認される洪水砂層は先述のとおり、完全に同時期に供給されたものではない。細かい観察を行えばこの砂層中にも弱い土壌化層が、つまり短時期であれ生活面が確認できる可能性がある。このように、ある安定した面から次の安定した面までの間に不安定ながらも面が存在し、この不安定な面が存在する一方で、この洪水堆積物が供給されなかった地区や洪水堆積物が薄く、旧地表面の復旧が容易であった部分は面の更新が行われなかった。面の時期比定の難しさの原因はここにもあると考える。なお、この洪水堆積物（洪水砂層2）によって、志紀遺跡一帯は平坦化を達成し、条里型水田展開への足掛かりを作ることになる。

しかし次の段階の飛鳥時代、奈良時代は水田面が検出されず、低湿地状を呈していた不安定な時期であった。河内平野の場所によっては、条里が施行されている時期であるが、志紀遺跡は自然環境がそれを不可能にしていたようである。

そして、第2の画期が9世紀である。発掘調査では各地区で条里型水田面が検出される。この面は、志紀遺跡で検出される最古の条里型水田面である。第4章によれば、第1の画期である弥生時代中期後半同様、乾燥した土地が展開していたようである。この自然環境が、条里型水田展開の背景にあったと

も考えられる。この画期以前については前述のとおりであるが、以後については鎌倉時代初め（13世紀）まで安定した面が展開する。この条里施行は山川氏が条里形地割面的施行１とし、権門主導型開発としているもの（山川1995）に該当すると考えられる。

志紀遺跡は高橋氏のいう扇状地に属し、今回の成果も氏の説に一致してくる。ただし、今回まとめたこの成果は自然科学分析の直接的援用が多く、考古学的な弱点は多い。その弱点の一つとして特に水利システムの復元が成されていないことがあげられる。その理由として、長方形の細長い調査地区の形があげられるが、他の類似する環境にある遺跡等で水利システムが明らかになっている遺跡から考古学的に応用してゆく等の作業を通じて、今後志紀遺跡における水利システムを復元してゆくことは完全に不可能ではなかろう。

さて、これに周辺遺跡の状況を加えると以下のようになる。弥生時代前期中頃の志紀遺跡での水田の開始と田井中遺跡における安定した集落の形成は一致することから、志紀遺跡の水田経営の主体者は田井中遺跡の住人であったと推測できる。以後、弥生時代後期前半に至るまで集落は営まれ、水田も同様に営まれる。集落は弥生時代後期後半から古墳時代前前半までやや断絶したかのような様相を見せるが、水田は連綿と営まれる。この不一致についてはいまだ説明できていないし、今回も出来ない。古墳時代前期後半以降、古墳時代後期まで田井中・木の本遺跡で集落が営まれ、志紀遺跡で水田が営まれる。古代前半は、前述のとおり集落も水田も不明であるが、高まりにあたる田井中・木の本遺跡部分に両者が存在する可能性がある。古代後半になると、条里型水田が検出される。この条里景観での集落の復元はなされていない。以上のように、志紀遺跡と田井中遺跡との関係性の画期は、古代に存在すると考えられる。この時期を境に、集落生産域という関係が同様の生産域という関係に変化する。その過渡期的な様相として、古墳時代後期の集落域の移動、古代前期の志紀遺跡の湿地化に伴う耕地化があげられる。そしてこの画期を境に、志紀遺跡に対応する集落域は西の木の本遺跡、北の老原遺跡へと変化していくようである。

以上のように、志紀遺跡及びその周辺の各遺跡をとりあげて志紀遺跡の変遷の概要を、これまでの調査データをもとにのべた。集落の出現や廃絶については、報告されてことをそのまま使用したまでで、特にその背景について何か解釈をするようなことはしていない。単なる冗長なデータの提示にすぎないが、志紀遺跡研究の一助になれば幸いである。

## 6　さいごに

例え遺跡が「真実」を内包していたにしても、我々がそれを知ることは不可能である。この「事実」をまず認識せねばならない。遺跡とはテクスト（原テクスト）であり、発掘とはその読み行為であり、原テクストの解釈であり、テクスト生産行為である。発掘が終了するとテクストは別の形の書かれたテクストとして現れる（１次的テクスト）。そして、これが完成されたテクストとして認知される。この場合の「完成」とは１次的テクストの作り手（発掘調査担当者、もしくは報告書作成担当者）が、自らの研究者としての地位が危うくならない程度の納得できるということであり、「完璧」なテクストをいうのではない。完璧なテクストとは存在しえないテクストであり、強いていえば原テクストの完全な読解である。１次的テクストから研究が始まることが多いが、この１次的テクスト生産行為においても、様々なノイズが入る。このノイズとは、原テクストが、我々が発掘をするまでそのままであることはないことや、発掘調査行為の主体的、主観的理由などによる。研究者はこの１次的テクストを更に批判的

解釈を行い更なるテクスト（１＋ｎ次的テクスト）へと高めてゆく。この究極の目的は、原テクストである。しかしこれを知ることは前述のとおり不可能である。であるから、限られたテクストから当時を推測するしかない。推測もまたノイズであり、その推測（直観）が、ある程度の妥当性を持つかどうかは、結果的には周囲の研究者に拒絶されないかどうかにある。が、この拒絶されなかったテクストも当然真実ではない。このように「読む」「書く」を繰り返しテクストは、「真実」の近似値へと近づいてゆくことができる可能性がある。「真実」は不変であっても知ることはかなわず、我々が語る真実は静的ではなく、批判されていくものである。

今回、私は本文をなすにあたり多くのテクストを読んだ。そして結果としてテクストを生産した。しかし、その読み行為が適切であったかといえば、多いに疑問が残る。結局のところ前述のとおり単なる読みであり、解釈がされていない部分が多い。この、テクストを生み出す行為自体の我々に存在する問題ということが今後課題となってくるように思える。すなわち考古学関係者自身の考古学である。この文は私なりの志紀遺跡の変遷を提示し、方向性を示したつもりである。今後は、私自身これを基に志紀遺跡に関する理解を更に深めてゆきたいと思う。

本文を成す際の資料収集において、大阪府調査分については阪田育功氏より、財団法人八尾市文化財調査研究会調査分については古川晴久氏より特にお世話になりました。記して感謝いたします。

〈参考文献〉

亀島重則1996「田井中遺跡前期弥生集落の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第34回）資料』
財団法人大阪府文化財調査研究センター
駒井正明1996「田井中遺跡の調査成果」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第33回）資料』
財団法人大阪府文化財調査研究センター
酒井龍一1982「畿内大社会の理論的様相」『亀井遺跡』　財団法人大阪文化財センター
山田隆一1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」
『弥生文化博物館研究報告』第３集　弥生文化博物館
高田明典1997『知った気でいるあなたのための構造主義方法論入門』　夏目書房
高橋学　1992「河内平野の地形環境分析Ⅲ」
『池島・福万寺遺跡発掘調査概報』Ⅶ　財団法人大阪文化財センター
渕　斎　1997「２．老原遺跡（95－319）の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』
八尾市教育委員会
米田敏幸1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
山川均　1995「条里制と村落」『歴史評論』538
他各遺跡報告書

## 第2節　突帯文土器とⅠ様式土器の共伴

今回の調査で弥生時代前期の遺構面を3面検出した。そして、各面を覆う第14・15・16層の各層で突帯文土器が畿内第Ⅰ様式土器に伴って出土した。各層の厚さは10～20㎝前後、調査面積約1700㎡のなかからの出土破片数は14層は約90点、15層も約90点、16層は約150点と決して多くない。各層は土質・色調から区別できるものであり、各層上面を遺構面として認識することが可能であり、各層の遺物は分離して考えることが可能である。

しかし、出土位置をみると、14・15層では調査区全体に分布するが、西側のほうが多い。一方、16層では調査区東部に集中する。また、土壌分析の結果、14・15層には人為的擾乱がみられ、16層には人間活動による撹乱はほとんど認められないと指摘されている。よって、14・15層出土遺物には人為的な撹拌の影響が及んでいる可能性が考えられるが、16層出土遺物は前者から分離することが可能であろう。

16層出土の突帯文土器は口縁部上端に接して突帯を貼りつける。口縁部上端に面を取り断面三角形ないし台形の突帯を貼りつけるものと、突帯と口縁部の整形を同時に行い口縁内径を頂点とする断面三角形の突帯を作るものがある。刻み目は浅いD字もしくは刻み目をほどこさない。これらは長原式土器の範疇に含まれるものであり、報告書の分類によるa2型およびb3型であろう[(1)]。共伴するⅠ様式土器はおおむね中段階とみてよいであろうが、甕頸部の沈線が4条のものが1点伴っている。

15層の突帯文土器は16層にみられる長原式a2型b3型に加え、口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼りつけたa1型が伴う。面取りした口縁部のやや下に断面三角形の突帯を貼りつけ、粗いD字の刻

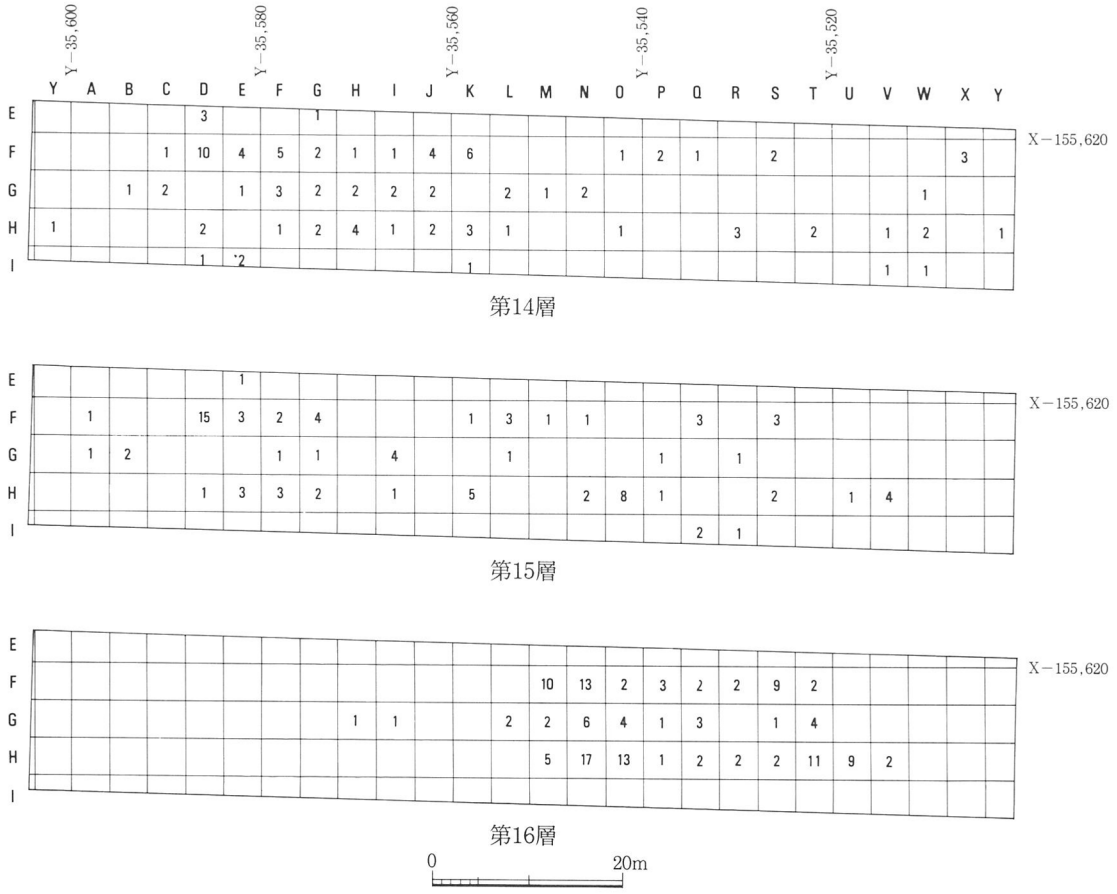



図63　第14～16層グリッド別土器片数

み目を付けるものと、口縁端部はまるく、口縁のやや下に細い断面三角形の突帯を貼りつけるものがある。後者は１点のみである。これに伴うＩ様式土器は中段階と考えられる。斜格子など赤彩を施すものもある。

14層の突帯文土器は面取りした口縁部のやや下に断面三角形の突帯を貼りつけ、粗いＤ字の刻み目を付けるものである。Ｉ様式の土器は貼付突帯を伴わず中段階の範疇に含まれるであろうが、沈線の条数が増加する傾向を示す。以上の14～16層の突帯文土器の胎土はほとんどが生駒西麓産のものであり、逆にＩ様式土器は生駒西麓産の胎土は少ない。

以上のように、各層で突帯文土器とＩ様式土器が共伴し、突帯文土器は上層になるにしたがい長原式が減少し、口縁部やや下に刻み目突帯を貼り付けるものが増加する。これに伴うＩ様式土器は段と貼付突帯は見られないので中段階に属するものであるが、最下の16層に４条の沈線を持つ甕が１点あることを考えると、この３層は中段階後半から新段階の始めごろの一定期間に堆積したものと思われる。

14・15層の口縁やや下に突帯を貼りつけ粗いＤ字の刻み目を施す突帯文土器は一見船橋式土器を思わせるものであるが、頚部の湾曲が弱く、肩部の屈曲がないなど、船橋式とは異なる要素もある。このような口縁部やや下に刻み目突帯を貼りつける土器は、植附・鬼塚・水走・宮の下遺跡などの生駒西麓から河内平野の遺跡に普遍的に存在し、Ｉ様式古・中段階の土器と共伴することが福永信雄氏によって明らかにされている[(2)]。氏はこの種の土器を船橋式の系譜をひくものと考え、そのなかでも刻み目の細粗など変移があることを認めている。その時期については、長原式に平行すると考えるものの、「いわゆる長原式が消滅した後も、水走遺跡の例から見て、縄文土器の最終末まで型式変化しつつ存在する」とも指摘している。

今回の調査結果では、口縁部やや下に刻み目突帯を貼りつける土器は長原式より上層から出土する傾向が強く、福永氏の見通しを裏付ける結果となった。その下限については、16層のＩ様式甕に４条の沈線をもつものもあることから、新段階まで下る可能性もあるが明確ではない。

弥生時代前期、志紀遺跡の西南に隣接する田井中遺跡ではこの地域の拠点的な集落が営まれている。田井中遺跡北濠地区西北端に突帯文土器を伴う遺構群が存在する[(3)]。これにはＩ様式土器はほとんど伴わない。この遺構群には石棒が伴い、やや東の包含層から土偶が出土するなど縄文的伝統を強く残す。

この東南、北濠地区の中央にＩ様式中段階の集落が成立する[(4)]。ここでは数％の突帯文土器が伴っている。この地点の集落は中段階前半で終息し、中段階後半から新段階には陸上自衛隊八尾駐屯地正門西側一帯（正門西区）に集落が営まれる[(5)]。ここでは大量のＩ様式土器が出土したが、突帯文土器は伴わない。

一方、志紀遺跡ではＳ10・11・14・17・20調査区[(6)]で突帯文土器が出土している。これらの調査区は志紀遺跡の西南部にあたるが、調査年次が新しく下層まで調査が及んだ調査区ではほとんですべての調査区で突帯文土器が出土している。したがって、広範囲にこの時期の遺構が広がっていた可能性があるが、今までのところ断片的に遺物が出土しただけで、明確な集落は検出されていない。そのなかで、田井中遺跡正門西区からわずか数百メートルの志紀遺跡Ｓ20調査区では、突帯文土器がＩ様式土器に伴ってやや多く出土し、粗雑なものだが建物の可能性があるピット群もある。土器は小破片が多く判別が困難なものも多いが、突帯文土器の割合は16層で約25％、14・15層では約40％である[(7)]。

田井中遺跡北濠地区西北端の突帯文土器集団、北濠地区中央及び正門西区のＩ様式土器集団、志紀遺跡Ｓ20調査区の両者が混在する集団の３者が東西１㎞の範囲内に存在する。北濠西北端の突帯文土器集団と北濠中央のＩ様式土器集団のどちらが早く出現したかはわからない。いずれにしても、遺構の広が

りや土器の量はⅠ様式土器集団の方が圧倒的に大きく、田井中遺跡の開発がⅠ様式集団の主導のもとに行われたのは間違いなかろう。

北濠中央の集団は中段階中頃に正門西区に移動し新段階まで続く。北濠西北端の突帯文土器集団はそれまでには消滅しているのであろう。志紀遺跡Ｓ20調査区の両者混在集団は彼らの系譜をひくものかもしれないが、これまでの調査の進行状況では何とも言えない。Ｓ20調査区出土土器の量は田井中遺跡のⅠ様式土器に比べて極めて少なく、集団の規模も零細なものであったと思われる。

河内平野の弥生時代前期の集落には、主にⅠ様式土器を使用するものと突帯文土器を使用するものがあり、1980年代前半の段階では、前者は河内潟南岸に、後者は生駒西麓や羽曳野丘陵北縁、上町台地に立地することが知られており、新たに進出してきたⅠ様式土器を使用する稲作農耕民がまず沿岸地帯に定着したと解釈された[8]。

その後、ほぼⅠ様式土器だけを使用する集落が羽曳野丘陵北縁の八尾南遺跡[9]や田井中遺跡で検出され、突帯文土器を使用し土偶や石棒を伴う縄文的色彩が濃い集落が立地すると思われたこの地域にもⅠ様式土器を使用する集団が存在することが明らかになった。長原・八尾南遺跡でも志紀・田井中遺跡でも直径１㎞の範囲内に突帯文土器集団とⅠ様式土器集団が併存している。両者は密接な関係を持っていたものと思われる。この関係を前提に志紀遺跡Ｓ20調査区のような状況が出現したのであろう。

(1) 大阪市文化財協会　1982　『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
大阪市文化財協会　1983　『長原遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
(2) 福永信雄　1997　「河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金関先生の古希をお祝いする会
(3) 大阪府教育委員会　1994　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ』
突帯文土器を出す遺構群からはⅠ様式土器は出ていない。この遺構群を覆う包含層からⅠ様式土器の小片が１点だけ出土した（亀島氏ご教示）。
(4) 大阪府教育委員会　1998　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅴ』
(5) ㈶大阪府文化財調査研究センター　1998　『田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防１次)』
(6) 調査区名は本章第１節で使用した記号による。
(7) 同一個体の可能性がある破片もあるが、接合できないものはすべて個別にカウントした。
(8) 中西靖人　1984　「前期弥生ムラの二つのタイプ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所
(9) 八尾南遺跡調査会　1981　『八尾南遺跡』
八尾市文化財調査研究会　1990　「八尾南遺跡（第15次調査）現地説明会資料」

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | しきいせきその4 |
| 書名 | 志紀遺跡（その4） |
| 副書名 | 大阪府営志紀住宅建替え事業に伴う発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第25集 |
| 編著者名 | 岩崎二郎 |
| 編集機関 | (財)大阪府文化財調査研究センター |
| 所在地 | 〒536-0016 大阪市城東区蒲生2丁目11−3　小森ビル4階　TEL 06−934−6651 |
| 発行年月日 | 西暦　1998年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 志紀遺跡（しきいせき） | 大阪府八尾市（おおさかふやおし）<br>志紀町西2丁目（しきちょうにしちょうめ） | 272124 | | 34°<br>35′<br>44″ | 135°<br>36′<br>45″ | 1996年2月14日<br>～<br>1997年3月25日 | 1,882㎡ | 府営住宅建替 |

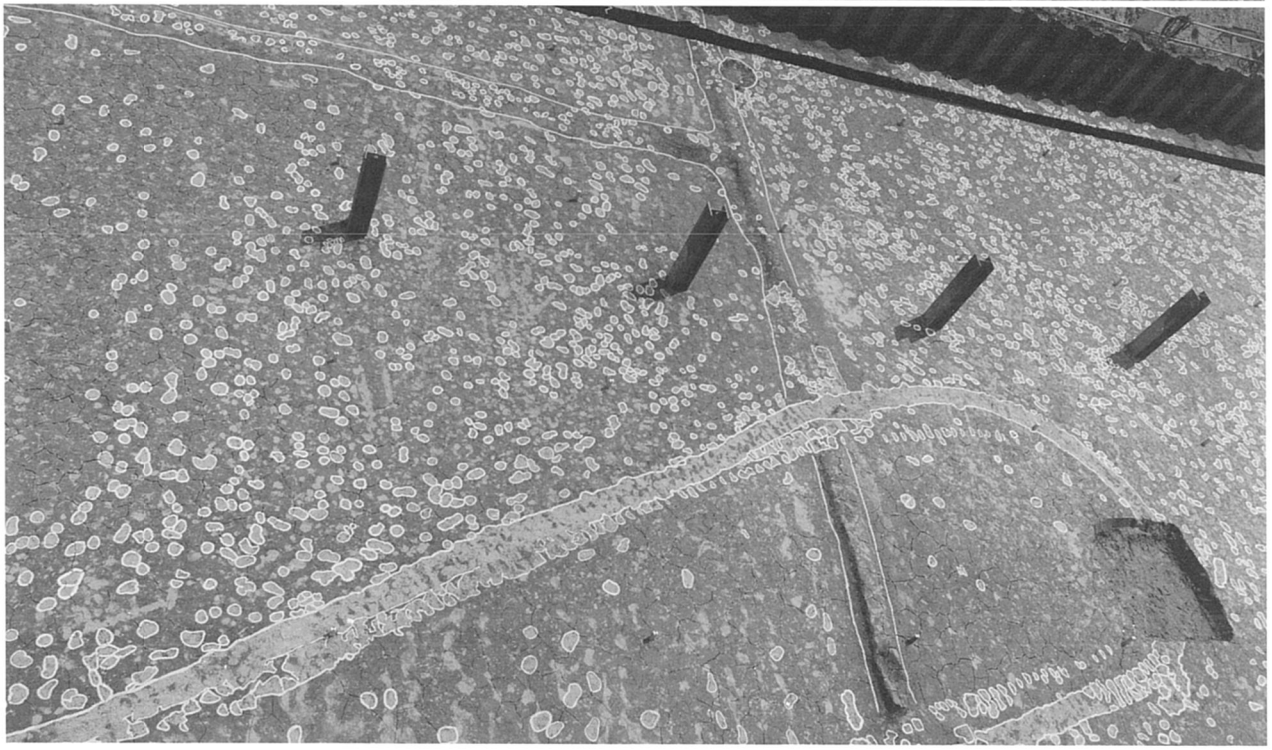
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 志紀遺跡 | 集落<br>水田 | 弥生時代前期 | 溝、ピット | 土器・石器 | |
| | | 弥生中期初頭・弥生中期末～古墳時代終末 | 小区画水田 | 弥生式土器・土師器・須恵器・鉄鎌 | |
| | | 平安・鎌倉時代 | 条里型水田 | 土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・和同開珎・馬鍬の歯・鉄鏃 | |

# 図　　版

図版6　第1遺構面

全景（東から）

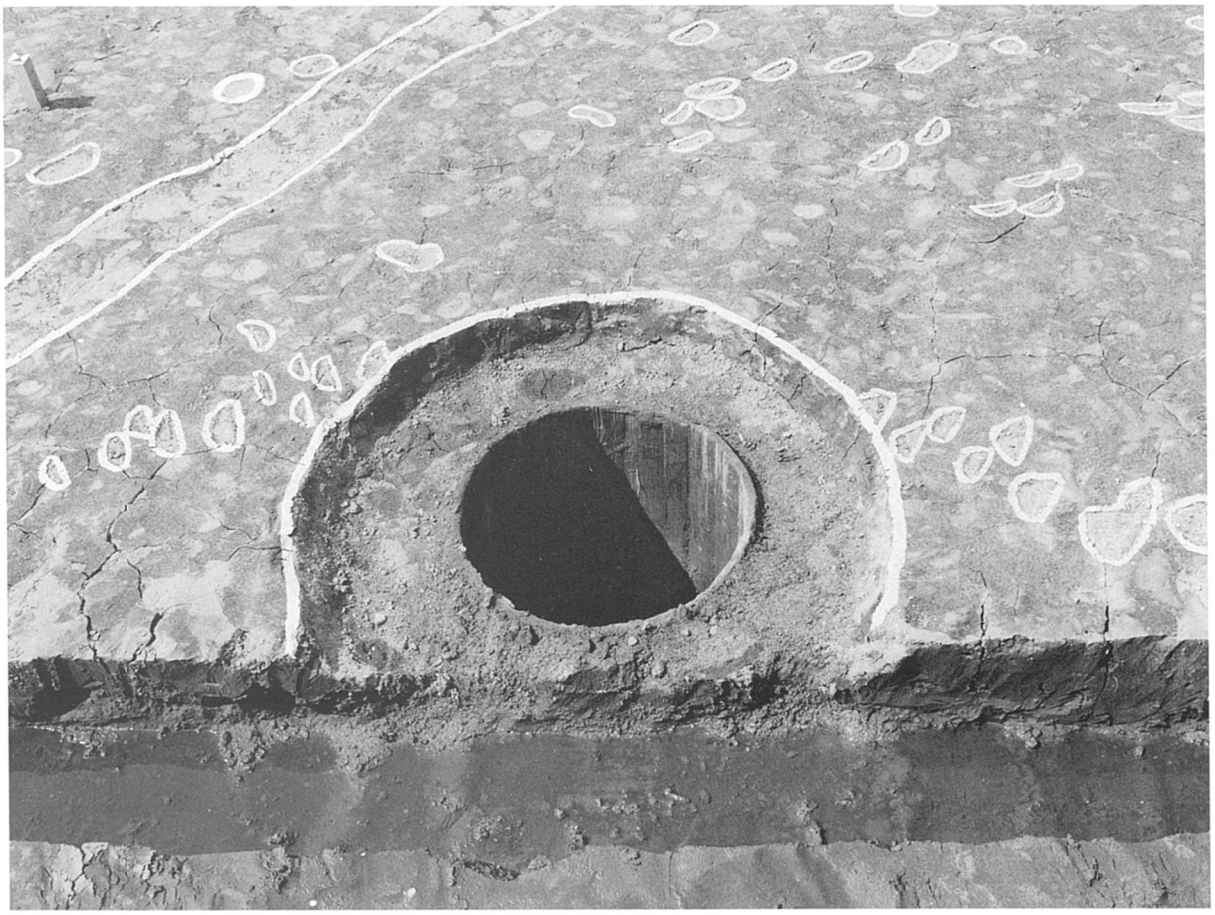
畦畔と耕作痕
（東北から）



図版7　第1遺構面

全景（西から）

畦畔と足跡
（北から）



SE101上面（南から）

SE101断面（南から）

図版9　第2遺構面

全景（東から）

全景（西から）

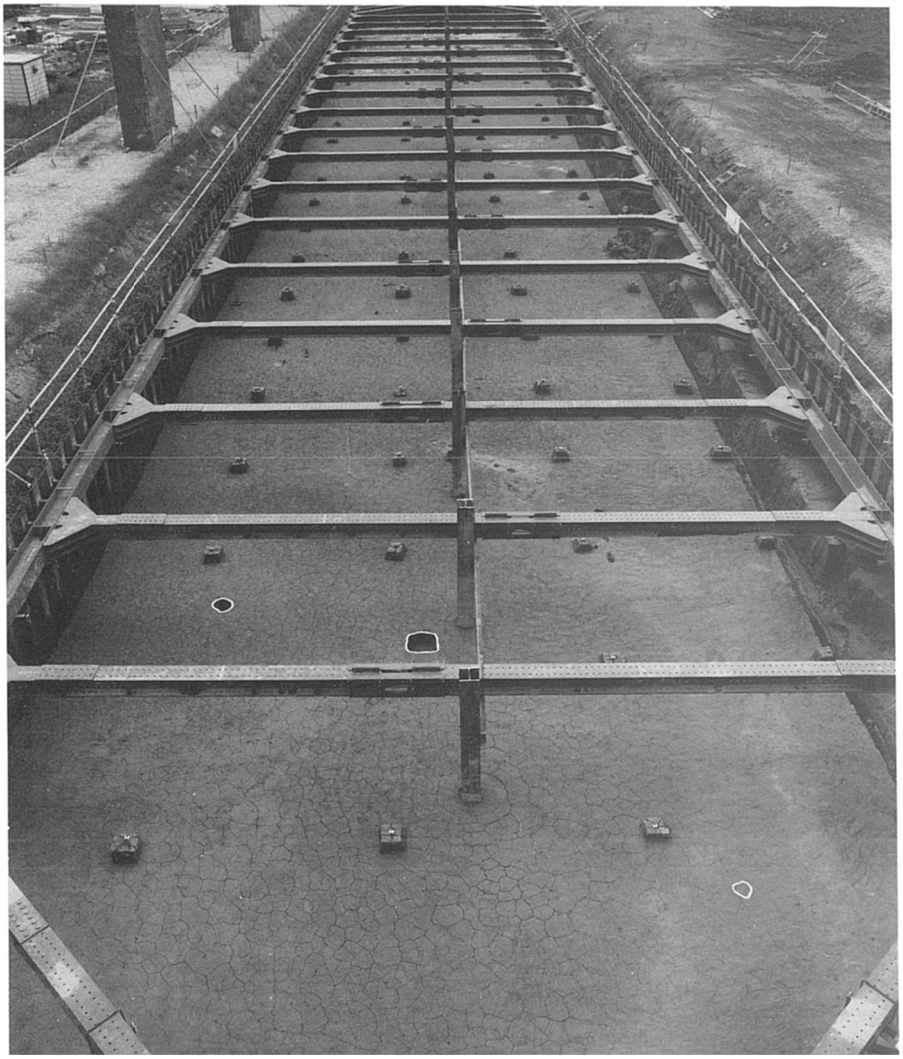
図版10　第3遺構面

全景（東から）

全景（西から）

図版11　第4遺構面

全景（東から）



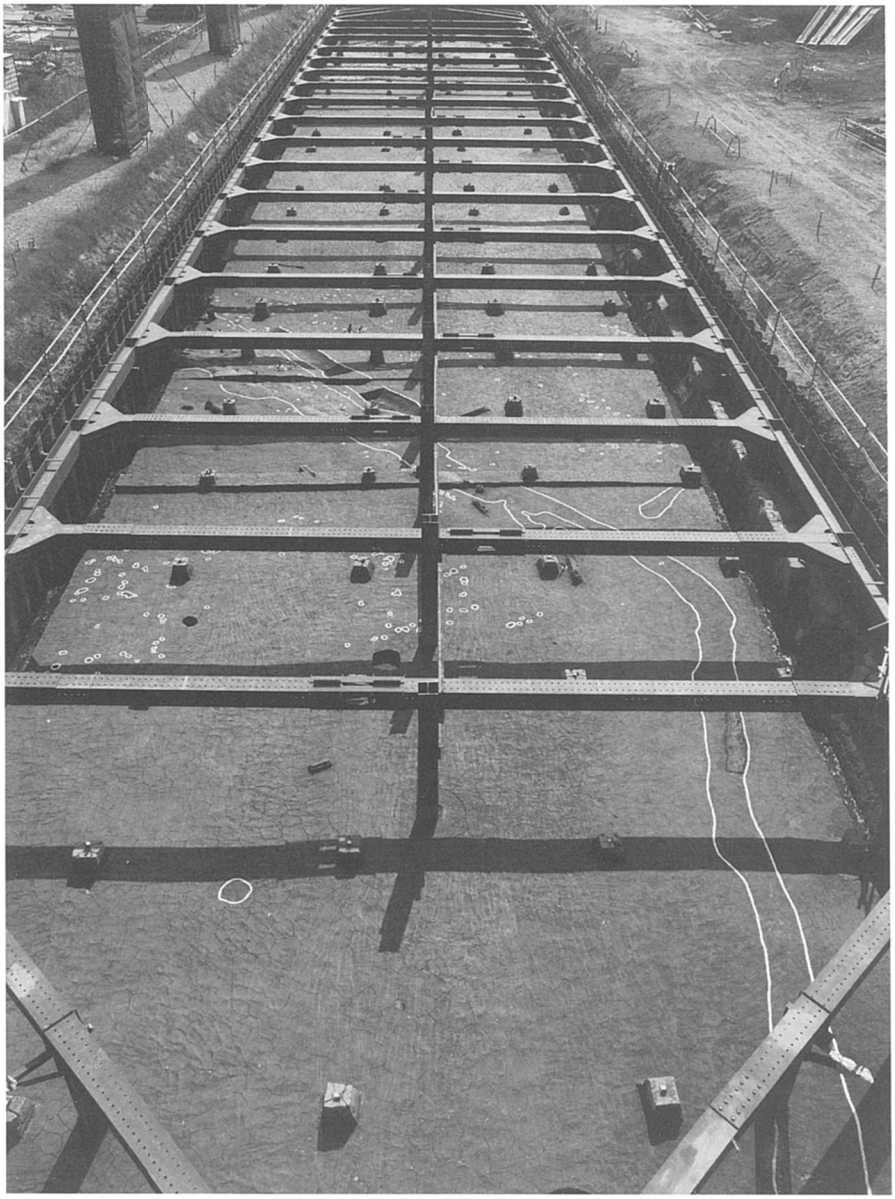
全景（西から）

図版12　第5遺構面

全景（東から）

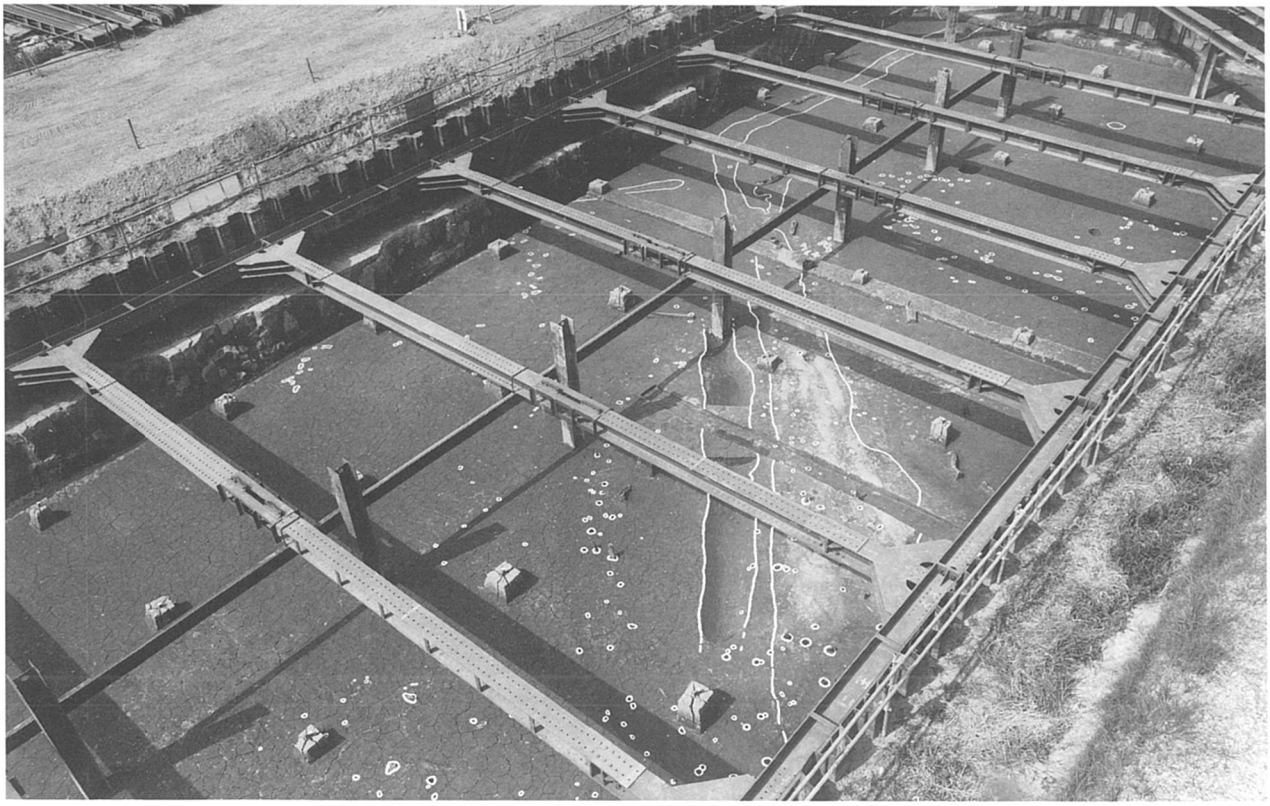
東端部畦畔
（北から）

図版13　第5遺構面



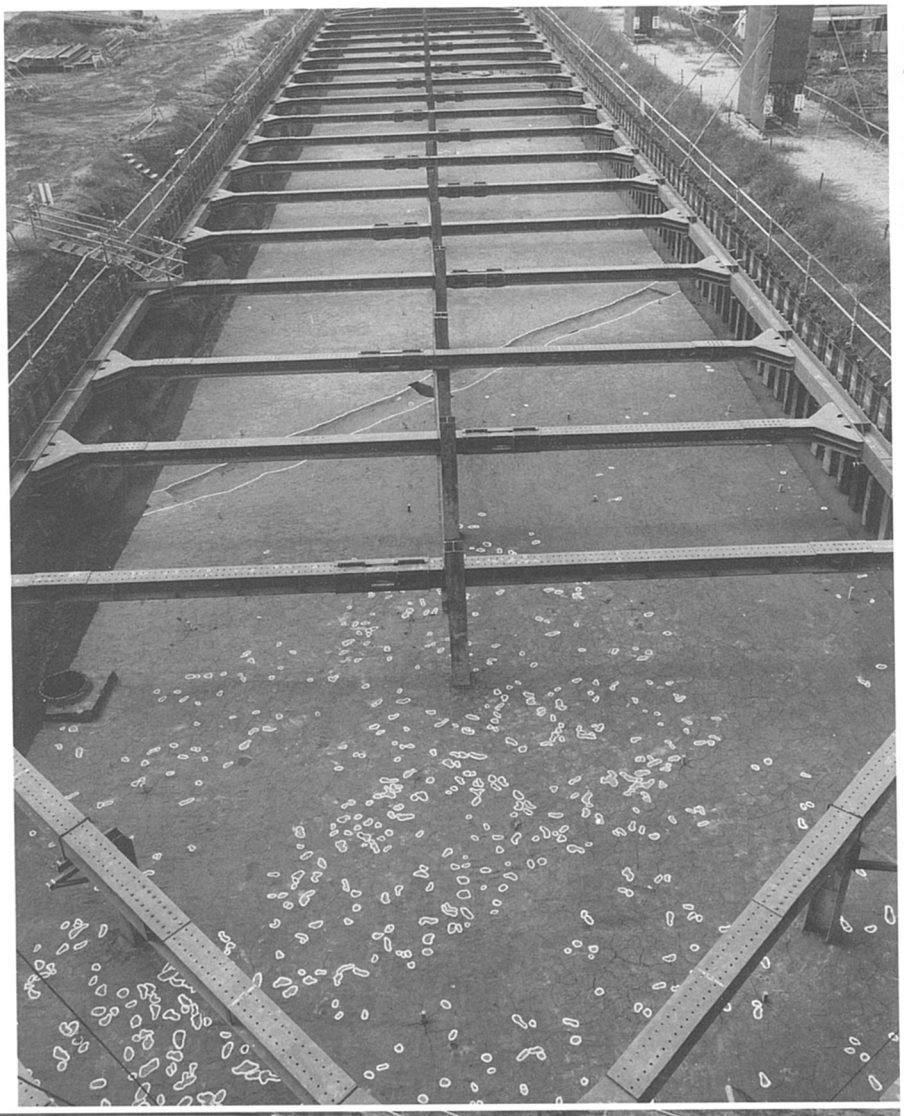
全景（西から）

大畦畔と抗群
（東北から）

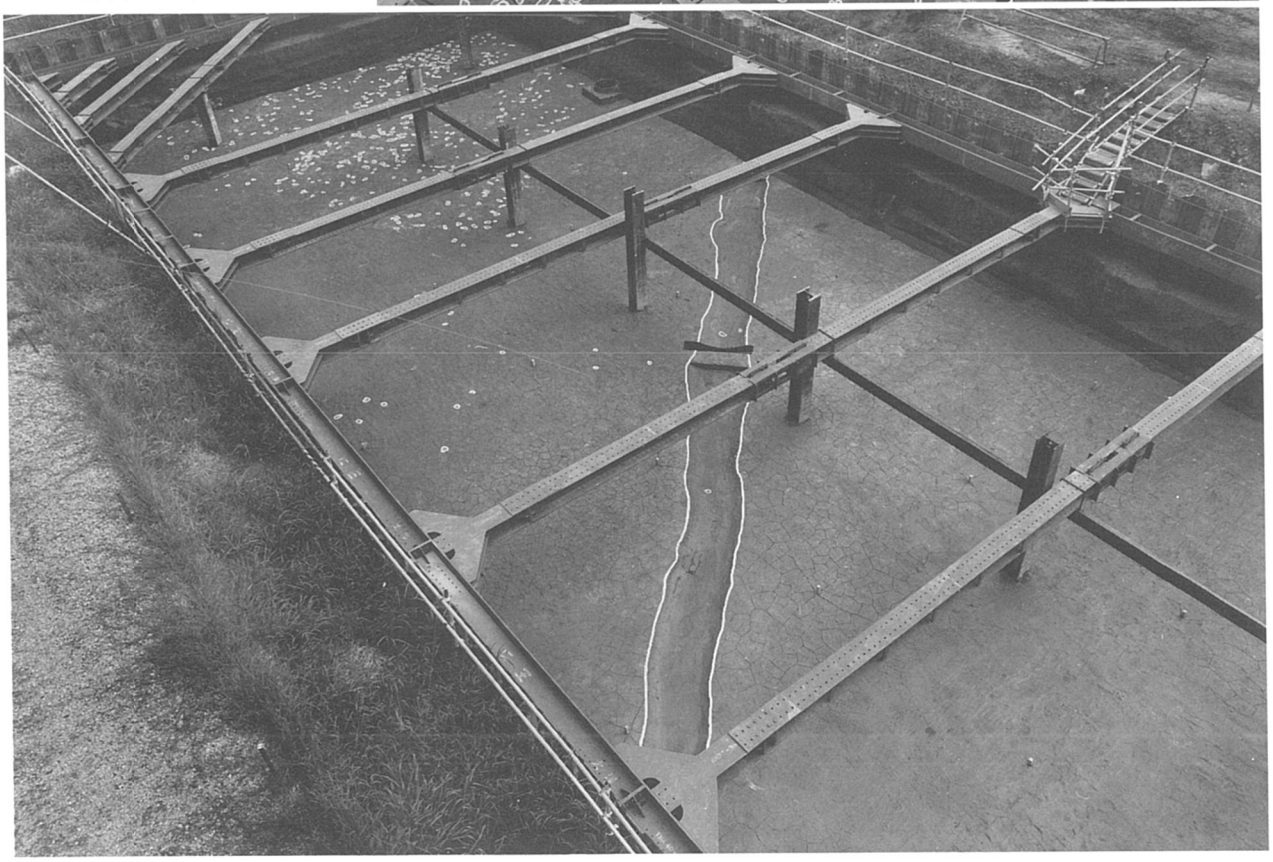


図版14　第6遺構面

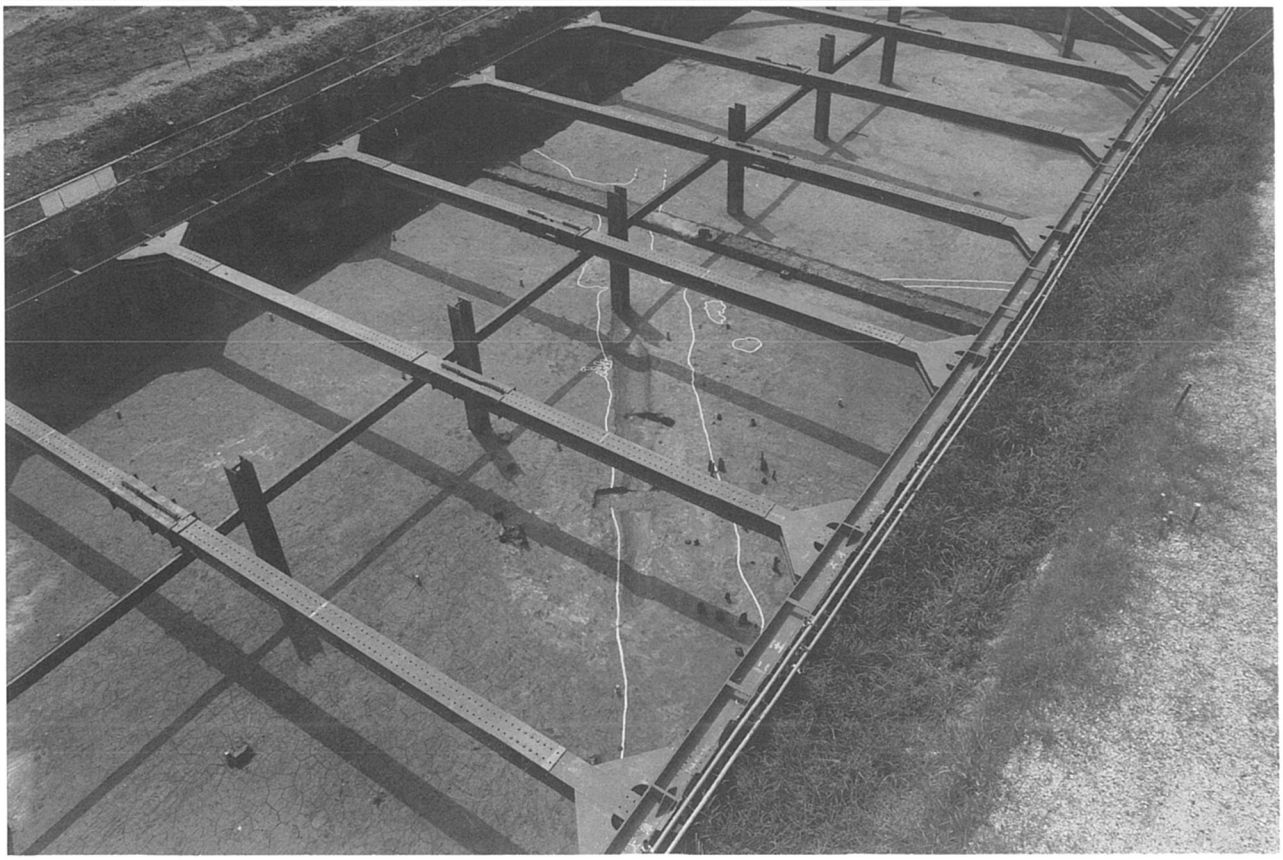
全景（東から）



SD601（西北から）



図版15　第6遺構面

全景（西から）

大畦畔と抗群
（東北から）